

海外研修視察報告書

海外教育実施高校教師レポート

昭和 54 年度

国際協力事業団

(Japan International Cooperation Agency)

701
24
EIP
BRARY

務広報
JR
80-2

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 4. 10	701
登録No. 03173	24
	EIP

昭和 54 年度海外教育実施高校教師海外研修視察報告書

【 も く じ 】

あ い さ つ	団長（富山県立福野高等学校長） 川人 貞現	
研修コース・研修日程・目的	1
海外研修派遣団	2
視 察 報 告	3
アルゼンチンを訪ねて	埼玉県立秩父農工高等学校 教諭 深 町 栄	3
パラグアイについて	山口県立山口農業高等学校 教諭 石 田 武 雄	10
サンパウロの印象	長野県北佐久農業高等学校 校長 宮 坂 高	17
観光のメッカ，リオから世界に誇る理 想首都ブラジリア	大分県立宇佐農業高等学校 教諭 松 山 尊	24
北伯農業におもう	山形県立新庄農業高等学校 教頭 柿 崎 重 美	29
ブラジルの自然	宮城県農業高等学校 教諭 太 田 勝 昭	36
帰国の途ロス・アンジェルズとホノル ル	高知県立安芸高等学校 教諭 高 橋 健	43
随 想		
移民とは何か	富山県立福野高等学校 校長 川 人 貞 現	49
参 考		
高校教師海外研修派遣一覧表	54

JICA LIBRARY



1053460[0]

あ い さ つ

国際協力事業団と全国高校海外教育研究協議会の御好意により、海外教育実施校の教師八名が、本年もまた南米を中心として派遣研修させて戴いたことを心より感謝し、御礼申し上げたいと思います。実に行き届いた事業団の御手配や心くばりは、行く先々にまで、心憎いばかりにしてあり、耳に聞き、文字で読んだ南米と、実際、自分の目で経験した南米との相違を、我々八名がそれぞれ感じるところは異るとはいうものの、今更ながら認識を新たにしました。

出発に当って、法眼総裁に対し、「事業団の意をうけて、充分視察研修をして来たい」と申し上げた処、「事業団の意志に従って南米を見てくるのではなく、自分の眼で、ありのままを見て来てほしい。良い点も悪い点も率直に見てもらうのであれば意味がない」というようなお言葉を戴いたのであるが、我々は、それこそ率直に、素直に南米諸国を見て廻ろうと決心したのであります。

今、ここにまとめた、このささやかな報告が、海外教育の一資料にもなれば幸いです。我々八名、それぞれの分担を設け、読む人にも興味があるように、各自が自由に書けるようにと、大体の大綱を決めただけで、なるべく細かな制限を設けなくて書こうということになっておりますから、或いは不統一の感があるかも知れませんが、南米はひとつじゃないのだ。こんな見方もあるのかというものになれば面白みも加わるし、総裁の意にもかなうのではないかと、思って試みたわけであります。

大方の叱正をお願いし、御批判御指導を賜われれば幸いです。

昭和 55 年 2 月

海外教育実施高校教師海外研修派遣団長

富山県立福野高等学校長 川 人 貞 現





研修日程

7月13日(土)～8月3日(金)

日 曜	時 刻	交 通	発 着 地	備 考
13	18:00 23:50	RG831	東 京	
14	07:30 15:05	BN 979	リ マ	
17	17:20 18:00	PZ 203	ブエノスアイレス	市内, 移住 地視察
18		バス	アスンシオン	
20	15:35 16:55	VP 133	イ グ ア ス	移住地
24	09:00 09:50	RG 342	サンパウロ	市内, 工業 団地等
25	09:30 11:05	SC 200	リオ・デ・ジャネイロ	市内
26	10:00 14:00	VP 282	ブラジリア	
29	16:45 17:40	VP 190	ベ レ ン	トマス移 住地等
30	08:45 15:15	BN 908	マ ナ ウ ス	
	17:15 19:13	WA 733	マ イ ア ミ	
1	10:00 12:25	CO 001	ロス・アンゼルス	デズニーラ ンド等
2	14:55	JL003	ホ ノ ル ル	
3	17:50		東 京	

目的

日本人の海外発展も愈々多様化し、多方面にわたり、海外に対する関心度、国際理解教育も高まりつつある現状に鑑み、全高海協の協力をえて、全国海外教育実施高校の中から教師を選抜して、移住者及び、日系人がもっとも多く活躍している南米・北米に研修のため派遣し、海外教育の普及を図るとともに、青少年の海外への関心、理解を増進し、もって将来の青少年の海外発展に資することとする。

昭和54年度海外教育実施高校教師海外研修派遣団



左から、太田、石田、柿崎、宮坂、川人、松山、高橋、深町の各教師

(事業団第5会議室にて)

分担	氏名	所属高等学校	職名	担当教科
団長	川人 貞 現	富山県立福野高等学校	校長	(国語)
副団長	宮坂 高	長野県北佐久農業高等学校	校長	(農業)
総務	柿崎 重 美	山形県立新庄農業高等学校	教頭	農 業
総務	石田 武 雄	山口県立山口農業高等学校	教諭	農 業
渉外	高橋 健	高知県立安芸高等学校	教諭	英 語
渉外	松山 尊	大分県立宇佐農業高等学校	教諭	農 業
会計	太田 勝 昭	宮城県農業高等学校	教諭	地 理
会計	深町 栄	埼玉県立秩父農工高等学校	教諭	食品化学

視 察 報 告

アルゼンチンを訪ねて

埼玉県立秋父農工高等学校

教諭 深 町 榮

◇南十字星をめざして◇

7月13日、新東京国際空港19時5分発、バリグブラジル航空RG831便、ボーイング707型機にてロス・アンジェルスに向った。離陸後すぐに夕食がだされた。日本時間11時、暗黒の空には無数の星が輝いていた。黒一色の雲海と空との堺、東方に引かれた一筋の青い線、やがてその線の巾が広がり増し、雲と空との堺がオレンジ色に変わった。午前2時視界が明るくなり、高度11,000mの機上で朝を迎えた。3時10分サンフランシスコ上空にさしかかり、3時30分朝食がだされ、それが終わるころには、雲の切れ間の海と空の青とがひとつに見えた。日本時間14日、午前5時5分、現地時間13日、午前12時5分ロス・アンジェルスに着陸した。気温は21℃であった。

アメリカ合衆国で生活したことのある私にとって、再びこの地を踏めたことに、心の奥から喜びと懐かしさがこみあげてきて、短い時間ではあったが、売店の人達や近くにいた人と自然話し込んでしまった。

約2時間後我が国では感じるることのできない人種のるつぼのようなロスを離れ、再び空の旅を続け、ペルーの首都リマへ向った。無限に続く広大なガラ砂漠と西シエラマドレ山脈を眼下に昼食をとり、やがて空も下界の雲も夕闇を告げる様相を帯びて来た。午後11時40分、夕食をとり、ロスをたち8時間20分後、現地時間夜中の1時20分リマに着陸した。気温は17℃であった。大型タクシーに4人ずつ分乗し、深夜のリマを市内のホテルへと急いだ。

ゆっくり休む暇もなく朝暗うちにホテルを発ち、空港へと向かった。定刻より1時間遅れて、午前8時、私たちを乗せたBraniff International、D-C8は曇り空のリマ国際空港を離陸、次の目的地、アルゼンチン、ブエノス・アイレスへと向かった。

飛行機は真綿を一面に敷きつめたような上を飛んだ。左にはそれらを突き破ったように、南米大陸アンデスの山々が空との堺まで明瞭にその雄姿を限りなく見せていた。それを下界に見つつ食べる牛肉、卵焼き、果物等の朝食はまた格別であった。チリのサンチャゴに給油のため50分ほど寄った。その後、再び離陸、雪におおわれているアンデス山脈上空を横切った。昼食をとり、それが済むころには、眼下は冬のアルゼンチンの樹木のない広大な温帯平原が広がってみえた。パンパである。リマ

を發ち、5時間40分後に碁盤の目のように区画整理されたパンパの農場、その農場に囲まれたブエノスアイレス市郊外、エセイサ国際空港に午後3時40分着陸した。地球を半周の長い飛行であった。



雄姿をみせるアンデス山脈

国際協力事業団ブエノスアイレス支部長、永田良三氏の出迎えをいただき、午前4時30分バスに乗った。片側3車線、途中1車線の直線道路を45Km離れた市内にあるPlaza Hotelへと向かった。皇太子殿下御夫妻が南米ご訪問の際泊まれたというホテルであった。

◇アルゼンチン◇

(1) 概況

面積は日本の約8倍、人口は2,640万人で日本の $\frac{1}{4}$ 、国民の大部分は、スペイン、イタリア系の子孫で白人の全人口に占める割合は97%、他は原住民及びそれとの混血その他である。

アルゼンチンは、東西約1,700Km、南北約3,600Kmに広がっており南北に長いので、気候も北部の寒帯にまたがっている。

ブエノスアイレスをはじめとする中部のパンパ地帯は温暖で、日本の気候と大差ない。しかし、南半球に属しているため、四季は日本と反対であり、私達が訪づれたときは真冬であった。本年は例年になく寒さであるとのことであったが、私の住んでいる秩父の冬よりは厳しさを感じることはなかった。

教育機関としては、小学校(7年)、中等教育機関(5~6年)として中学校、農・工・商業学校、師範、美術学校等があり、高等教育機関としては、高等師範(4年)、大学(4~6年)があ

る。小学校は義務教育制ですべて無料、中等、高等機関も公立であれば無料である。

アルゼンチンは1967年3月29日、ビデーラ（Videla）陸軍長官（今年10月上旬国賓、大統領として来日）を首班とする軍事政権が成立した。今回の軍事政権の成立は、政治、経済、治安等極度に混乱した国内秩序を回復するものとして、またペロン政権末期の窒息しそうな混乱状態から脱却する唯一の方策として、国民は全面的にこれを肯定、平静に受け止められた。

以来、3ヶ年にわたり、軍事政権は、当初の革命綱領に従い、国家再建のためのプロセスの実現のため努力を続けてきた。この結果、かつてのテロ、ゲリラ活動は一掃され、治安が回復されたほか、経済再建計画も軌道に乗りつつあり、過去3年間における軍事政権の業績は高く評価されている。目下のところ、インフレの抑制と政治活動再開の問題が懸案となっており、これらを実現する時期と方策とが今後に残された大きな課題となっている。

(2) 首都ブエノス・アイレス

ブエノスアイレスはよい空気の意でパンパ背景の港湾都市、小麦、肉の輸出港で南米のバリと呼ばれており、人口は約300万、周辺地区を合わせると840万（中南米第2位）である。

私達の宿泊したプラザホテルの前は、アルゼンチン独立の父であるサンマルティーン将軍を記念してのサンマルティーン広場である。そこは地下駐車場、地下鉄の工事が進められていた。近くのフロリダ通りは東京の銀座通りにあたり、ここでは半世紀以上昔のずっしりと重みのある高い建物が整然と並び、谷間の道は石だたみがみられ、バリ等の絵画によくあらわれてくるような光景であった。

鉄道も地下鉄も日本より14、5年前に開通したこの町は、道巾144mの7月9日大通り、5月大通り、ローカル将軍大通り等と名のつけられた道路が碁盤の目のように走っている。現代建築とコロム劇場のような70年前の建物、国会議事堂、大統領政庁等、国民の約85%がカトリック教徒であるため、町のところどころにみられるカテドラル（寺院）、これらが新旧よく調和のとれている町並みであった。またいたるところに公園があり、そこでは多くの人たちがサッカーに熱中している姿を見て、先日日本で開催されたユース・サッカー大会でアルゼンチンがソ連を破り優勝したが、その源はこのようなサッカー人口とサッカー熱にあるのではないかと思わずにはいられなかった。数多くの公園や、プラタナス、アカシヤ、ハカランダ（アカシアに似ていて紫の花が咲く）、パオボラチョ（よっぱらいの木）等の街路樹が町並みにさらに美しさを添えていた。

昼食に1時間半もかけるというアルゼンチンである。私達は一度ラプラタ川のほとりにあるレストランへ食事にてかけた。ラプラタ川はここでは巾37Kmあり、海のように見えて対岸はウルグアイである。食事は、インパナダと呼ばれる形は日本のギョウザで中は肉まんのようなものと、フランスパン、ワイン、日本の3倍ほどもある肉の柔らかいビーフ・ステーキ、サラダ（トマト、タマネギ）、ジャガイモ（フライドポテト）、デザート（オレンジ、リンゴ、バナナ、パイナップル、ナ

ン)である。牛肉は大きすぎて半分食べるのがやっとであった。食事代は、税金、チップ含めて8人で130,000ペソ、約100ドルであった。食べ終ったとき私がボーイに、エスタバ・ムイ・リコ(大変おいしかったです。)という大変喜んでくれて片言での話しが始まり、現地のタバコを一箱いただいたので、私もセブンスターをあげたりした。ここでの人たちにしても、町でであう人達



「アルゼンチンの大きなビーフ・ステーキ」

も皆陽気で、親しみやすい国民性であるという感じを私は強くうけた。私は人間は皮膚の色が違っていても、国境や国家や民族、宗教をのり越えても心から信じあい助けあうことができるのではないかと思う。私は今までの自分の体験から得たこととして、このことを時々高校生に話してやっている。

アルゼンチンに移住され、ブエノスアイレス市郊外に住んでおられる埼玉県出身の小林ツネ子様(ご主人は長野県出身)のお宅におじゃました。ご主人の車で送迎していただき、各種のアルゼンチン料理、それに寿司、鍋焼きうどん等の和食もご馳走になりながら、アルゼンチン、日本の話し等で夜の更けるのを忘れさせられた。また事業団の方々の心からなる歓待、これらの異国での心温まるできごとは、一生涯私の心から消えることはないであろう。

私たちはこの他に市内では在アルゼンチン日本大使館を訪問し、谷口楨一公使の話しをうかがい、事業団支部を訪づれ支部概況の説明をうけた。

ホテル近くの大きな毛皮製品の店へ、全員でかけたとき、全商品一割引きということで、団員のほとんどが、ハンドバック、サイフ、敷物、手袋等沢山買った。私が精算するときに、もう少し

値引きしてほしいと話すと三割引きにしてくれた。そのうえ、美人の店員が買物が終わったら待っていてほしいと私に話しかけてきた。店の出口で待っていると、オストリッチの皮のサイフ三個もってきて、「どれでも好きなのを一つお選び下さい。大変お世話になりましたので。」というので、その理由を聞き、「いや、構結です。」と辞退したが強く進められたので、私がどれが良いかわからなかったので、彼女に推選してもらったのを手にした。彼女と店員は私が先生方7名をつれて、その店に行ったのだと思っていたのである。というのも買物の前日、私は在アルゼンチン埼玉県人会の鈴木量平氏（ブエノスアイレス近郊で花卉・養鶏業）と一緒に、その店に見学に行っていたのである。旅というものはどこでどうなるのか、ハプニングを生じるものである。

ブエノスアイレスは夜が遅く、週末ともなると夜中でも人波であふれていた。私達も午後9時頃より夕食をとった後、11時にアルゼンチン・タンゴ・ショウに入った。軽快なリズムにのって華麗なショウが展開された。私たちはショウはまだまだ続いていたが、午前1時10分ホテルへと急いだ。ショウ代は、ウイスキー、ビール、ジュース等を飲み税金、チップを含めて8人で180,000ペソ、約130ドルである。



「アルゼンチン・タンゴ・ショウ」

(3) 園芸センター視察

市内よりバスにて、1時間45分の郊外、見渡す限りの平原地帯、パンパの中にある国際協力事業団園芸センターを事業団の渋谷氏の案内で視察した。

アルゼンチンにおける在留邦人及び日系人の数は31,500名(8,700戸)に上っているが、これがアルゼンチンの全人口に占める割合は僅か0.12%に過ぎない。これら邦人及び日系人の内、約80%がブエノスアイレス市内及びその近郊地区に居住している。

在留邦人及び日系人の職業別内訳は、洗染業者42.6%、花卉栽培業者18.3%、一般農牧業者8.4%、会社員6.3%その他となっている。

日本人及び日系人の農業従事者の7割は、ブエノスアイレスを中心とし、その近郊地帯で1,500家族が花卉栽培経営をしている。特にバラ、カーネーション、菊が主体で6m×40mのビニールハウスを作っている人が多く、古い人で資本ができてバラ栽培、入植後まもない人は菊、カーネーション栽培が多いようである。

移住当初は上記温室が1~2棟で経営が成り立ったが、現在では普通で10棟ないと経営安定が難しいと言われている。そこで経営も企業的になり、苗はイタリアやスペイン系の資本をもっている人が作り、日系人は切花栽培者が多く、苗作りと切り花生産の分離がなされてきた。

4~5年前よりカーネーションが腐る問題が表面化し、その苗の80~90%はウィルスによって、また30%は萎ちょう細菌病におかされている。これがアルゼンチンの花卉園芸農家では大きな問題になっている。

そこで園芸センターでは、岡山大学助教授の安井公一先生が中心になられて、周囲の農家から苗を取り寄せて、その苗の検定に取り組んでおられた。ウィルスに汚染されていない苗をいかにして農家に分譲するかということが、大きな課題の一つであった。

ここでは、現在は日系人を対象として無病菌苗の頒布を行っているが、将来はアルゼンチン人に対しても広くこれを開放、アルゼンチン全体の花卉、蔬菜栽培技術の向上に資せんとしたいとのことであった。

(4) ウルキーサ(Urquiza)移住地視察

園芸センターの視察を終え、さらにブエノスアイレス市より郊外に離れウルキーサ移住地へと向かった。

途中グレウ(Glew)の町で昼食をとった。それは、硬いパン、ブドウ酒、チンチュリン(牛腸の内容物原形のまま焼いたもの)、チョウリン(豚肉のサラミソーセージ風)、アサード(牛肉の厚い骨付き焼肉)、サラダ等であり、腹一杯食べて一人当たり約1,500円であった。

ウルキーサ移住地は日本人が全体の70%、180世帯いる。平均で6m×40m(電害対策の面からの金網の関係)の温室を10棟もっている。

ここでは新潟県出身の田中善太郎氏の農場を見学した。菊、カーネーションを栽培しており、年間1,200万円の粗収入であると話されていた。田中氏はアルゼンチンに長く住んでいると、日本のこせこせしている生活にはなじめないし、日本に帰ったとしても、またアルゼンチンに戻ってくる

気持ちであると言われた。その温和な話し方の中にも、移住者としての力強さと、精神の逞しさを感じた。

◇おわりに◇

アルゼンチンは労働者優遇措置がとられてきたので、雇用労賃が高く、花卉栽培の場合経営面積が2～3 ha、多い人で10 haで生産労賃が高つくこと、さらに温室の関係から塩類収積、土壌消毒の問題等が多いという感じをうけた。また、生産した花の販売、市場組織の問題があり、現在共同出荷体制を作り、値くずれの防止に努力しているが、なによりも農政の安定が重要ではないかと感じた。

アルゼンチンは、我が国の約8倍に相当する国土を有しているが、人口は4分の1に過ぎない。極めて豊富な天然資源を持っているにもかかわらず、人と技術と資本の不足により、充分に開発されていないのが現状である。今後、農牧業の振興を計り、農牧産品の輸出を増大することにより、工業化に必要な資本を獲得すべきであろう。

現在、経済再建計画も軌道に乗りつつあるが、日本からの進出企業、技術援助等は一部を除いてこれからという感じをうけた。

移住者の方々の花卉栽培、農牧業等のアルゼンチンにおける評価は高く、2世、3世の日系人は、まだ少数ではあるが、官公吏、学者、弁護士、医師、会計士、教師等多方面において活躍している。これらから、広大な土地を所有するアルゼンチンへの農業移住は、今後大きな意義を持つのではないかと感じた。

移住は移住環境条件の整備されているところへの移住であるよう国が一層、その努力をし、また、それは継続的、永続的でなくてはならないし、優秀な人材を求めべきであると思う。このことが、将来の日本と受け入れ国相互の発展につながるものと思われる。

私もこの視察研修の体験を生かし、今後一層の海外教育の普及と充実に図り、高校生の海外への関心、理解を増進し、彼らが国際社会で通用、活躍できるよう寄与したい。

パラグアイについて

山口県立山口農業高等学校

教諭 石田 武雄

南米大陸のほぼ中央に位置し、北をボリビア、南と西をアルゼンチン、東をブラジルに囲まれ、海をもたない、内陸国で、海洋への道は、パラグアイ河とパラナ河の下流ラプラタ河を経て大西洋に通ずる河川の利用と、首府アスンシオンからブラジルへ通ずる国際道路を経てブラジルのパラナグワ港に通ずる陸路があり、面積約40万6,000平方キロでわが国よりもやや大きく、人口約270万で年間増加率は3.4%といわれている。人口の96%は征服者スペイン人と原住民であるガラニー族の混血でしめられているので、アルゼンチンなどと比べ親和感がある。又全人口の36%が都市とその近郊に居住し、さらに全人口の96%が東部パラグアイに集中している。

国語はスペイン語であるが、地方ではグワラニー語が使われている。気候は東部パラグアイは亜熱帯で、西部パラグアイは熱帯性であるが、内陸国できわめて大陸性気候で1日の気温の変化は大きい。中国大陸の気候とにている感がある。平均標高250m、年間の降雨量1,900mmといわれている。われわれの見たパラグアイは東部であるために亜熱帯性気候で自然条件に大変恵まれている。パラグアイ人はララン民族に共通な非常に陽気な国民であると同時にのんびりとした性格をもつ楽道家である。余り勤労はしない。「今日は今日」「明日のことはわからない」とする考え方をもっている。聞くところによると土曜日の夜など若い者は、食べ、のみ、踊り合い夜を徹することもしばしばとか。

教育については、

普通教育	小学校	6年	義務教育で授業は半日
	中学校	3年	
	高等学校	3年	
普通教育	大学	5～6年	① 国立アスンシオン総合大学(1889年創立)法律・医学・歯学・農業・獣医・化学・土木・建築・経済・経営・哲学・歴史・美術と各部門を有する総合大学。 ② 私立カトリック大学(1960年創立)法律・外交・会計・社会・数学などの部門を有するが、医学・土木・建築などの理料系の部門はない。
	士官学校 警察学校 師範学校 商業学校 工業学校 農業学校等	5～6年	} 義務教育修了者も進学できる。

ア 国立の学校は、小学校から大学まですべて無料となっている。

イ 中学・高等学校への進学に際しては、入学試験は実施されず、小学校あるいは中学校の成績が

参考にされ、大学への進学には相当難かしい試験があり、入学後も成績の悪いものは、容赦なく落第にされる。

ウ パラグアイは、ブラジル、アルゼンティン、ウルグァイ、ペルー、ボリビア、コロンビア及びスペインと学位の有効相互協定を結んでいる。

政府は教育に力をいれているが、一般に教育に対して関心はうすく、無学の者が相当に多いと聞かされている。産業としては多くの低開発国同様、農業、牧畜、林業に基礎をおいた、モノカルチャー的構造で、国民生産に占めるこれらの割合は約33%、その貿易構造も、牛肉、木材、雑穀等及びその半製品を輸出、日常消費物資の大部分を含む工業製品を輸入する原料輸出国の形態をなしている。

・主要農産物 一般的に農業、畜産、林業の特徴は、伝統的な生産物が大きいウェイトを占めており、マンジョカ、棉花、タバコ、とうもろこし、かんきつ類、肉牛、木材である。最近養蚕の生産も盛んになってきているようである。

7月17日 はだ寒いブエノスよりの出発が約1時間おくれて夜のアスンシオン空港へ到着、事業団職員のお世話により、車でホテル「チャコ」につき、久方ぶりに日本食をいただきいろいろと、こん談をし、夜のアスンシオンを見学した。国営のギャンブル場などがあり、南米の国らしく、町を歩く人も陽気でのんびりしているように思われた。

7月18日 ホテルで朝食をとりながら、窓外を見ると、雨で増水したパラグアイ河と煙突ひとつない、市街地が緑にかこまれて大変美しく感じた。港には2,000 t級の船が入港し、アルゼンチンなどから生活物資、工業製品をはこび、この国の主な輸出品である、牛肉、木材等を積み出す内陸国パラグアイの唯一の輸送動脈である由、朝食後、事業団および大使館にて現地事情の説明をうけ、ラパチョの咲きほこるスペイン風の家のならぶ市内見学をし昼食の後バスに乗り、国際道路をイグアスに向う。途中道路の両側に亜熱帯特有の樹木が繁茂しておるかと思へば、原住民のおそまつな家があり、わずかな草むらには牛がこのこと歩いており、はだしの子供達が遊んでいる風景はかつて東南アジアの高原地帯で生活していた時代を思い出した。286 Kmの直線に近い国際道路を旅のつかれも忘れて、飽きもせず景色を見ながら18時すぎに暗くなったイグアスに到着、事業団、農業試験場職員の心温まる歓迎をうけて、大変なご馳走になり、試験場の研修室に泊った。夜雨がふり気温も下り、ゆっくりと眠った。

7月19日 朝、雨もあがり、本当にすがすがしい気持ちになり、事業所、試験場にて現地の説明をうけ、事業所の職員の案内でイグアス移住地の見学にいった。この移住地は戦後事業団が購入した。フラム、アルト・パラナ、イグアスの移住地の中で最も大きく、移住の歴史も浅い(昭和36年設定されている)

1. 位 置

南緯 25° 30′ 西経 35° (北半球は台北、パキスタンのカラチと同緯度)

2 面積 87,762.75 ha

3 標高 最高 299 m 最低 182 m 平均標高 250 m

4 地形・地質・土壌

テラロシヤ土じょう（玄武岩の風化したラテライト化土じょう）シルト質土じょう，泥炭質土じょう等の分布する大波状形の緩起伏地帯。地区中央の国道が分水嶺となり北部イグアス河，南部モンダウ河に注ぐ。PHは5°前後の酸性土じょうである。肥沃土で土層が厚く，保水力，透水性とも良好で何を栽培してもよくできる。

5 植生林相

高地 亜熱帯かつ葉樹

低地 ラバーチョ，セードロ，ウプィテロタワタン，ペラレヴィ等の有用材

6 水利 井戸 深さ 12 m前後で出水

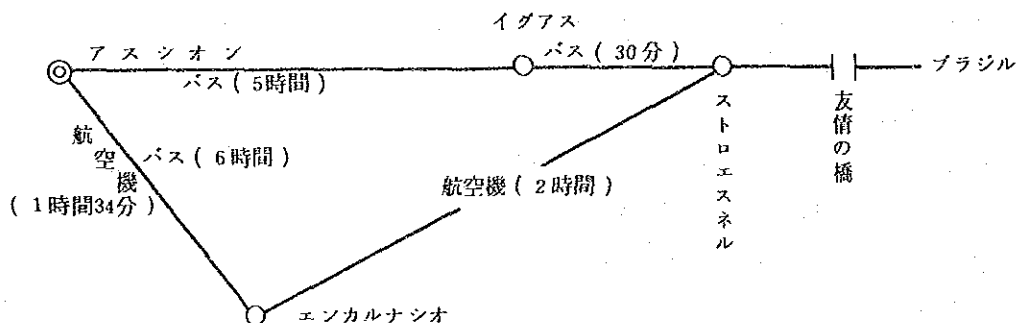
小河川が多く水利の便はよい。

7 気候 大陸性亜熱帯気候

最高平均気温 26.5℃ 最低平均気温 13.7℃ 平均気温 21.7℃ 年間降雨量 1,900 mm

春 9月中旬～12月下旬 秋 3月下旬～6月中旬 夏 12月下旬～3月下旬 冬 6月中旬～9月中旬

8 交通事情



比較的便利がよい移住地である。市場はアスンシオンが中心である。

9 入植地の状況

(1) 入植の経緯

年度	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77
入 植	14	2	19	36	30	25	25	30	42	23	21	5	10	2	13	2	21
退 耕								5	14	11		1			2	2	5
年度末現在数	14	16	35	71	101	126	151	176	204	216	237	241	251	253	264	264	280

日 系 人 280 戸 1,110 人
 現 地 人 147 戸 990 人
 計 427 戸 2,100 人

(2) 営農状況

1 戸平均の土地面積

地目	田	崗園地	畑	採草地	放牧地	植林地	宅 地	廃耕地	開墾地	未開墾地
H _a	0.5	1.2	27.9	1.6	21.3	1.0	0.7	5.5	59.7	72.1

となりの国アルゼンチンの日系人の農家に比べると相当広い土地であるが、未開この土地が多いので今後の希望がもてると同時に経営設計の研究が必要である。

10 教 育

○西語小学校

教師 5 生徒数 (日系人 146 人 バ国人 185 人) 午前、午後の 2 部授業 計 331 人

○西語中学校 校舎がないので小学校の 1 部も借用

教師 4 生徒数 (日系人 32 人 バ国人 27 人) 合計 59 人

○日語学校 西語小学校の 1 部を借用

教師 8 生徒数 149

○イグアス農業高等学校

対象は日系人の子弟で毎週土曜日の午後西語小学校の 1 部を借用して授業をしている。

生徒定員 40 名 修業年限 3 ケ年 教師は農業試験場及び事業団の職員があたり教科目は

普通教科=日本語、数学、植物生理

農業教科=野菜、果樹、畜産、養蚕、土、肥料、作物保護、農業機械、農業簿記

家庭教科=食物、保育

11 その他

農協、自治活動、診療所、治安等の関係も一応整備されている。

事業団の車で、試験場より、診療所、学校、協同組合などの素朴な建物が点在する、市街地といっても西部劇の舞台に似たようなところを通った。

I 佐藤清次 北海道出身

氏は昭和31年にフラム移住地に入植し、マテ茶、油桐の栽培をしていたが、昭和40年にイグアスへ入植された由。当時は畜産で肉牛180頭を飼育されていたが、現在は230haの所有で109haに大豆、とうもろこし、トマト、メロン等の栽培。40haの牧野に肉牛38頭を飼育している。

家族はご夫婦子供2人、研修生2人、計7人で常時現地人労働者を使用している。なぜ、フラムからイグアスへ移住されたか、又畜産経営から、雑穀、野菜栽培に移らなければならなかったかについて、問題があると思った。

II 倉兼一二氏 大分県出身

昭和51年入植、現在103haに乳牛30頭をはじめ養豚、養鶏、水田、マンジョカ等の飼育栽培、多角経営をやっておられる。さらに570haの未開こん地を所有し、将来は畜産主力の経営をすることがゆめである由。ご家族はご夫婦、長男ご夫婦、二男、甥ご夫婦、各々の子供や研修生の計12人の大家族であるが、本当に和気あいあいで、なごやかな様子には感心した次第である。聞くとところによると氏は北海道と大分でも乳牛20頭も飼育する大牧場を経営されていた由。公害のない、だれにも気兼ねすることのない自分の力で自由にやれる。金もうけ以外にバイオニア精神がこの地へ移住させたと云われている。何事にも研究熱心で、米の品種改良、増収技術、収穫、乾燥の機械化、水の問題、乳牛、肉牛の品種、病虫害対策、さらに販売面等といろいろ説明をうけて頭が下る。最後に移住された一言、今の感想はと尋ねたら、「最初不安はあったが、やっぱり来てよかった。何よりも家族が皆んな開拓精神にあふれ協力してくれてうれしい」とのことでした。

III 佐藤隆志 北海道出身 入植4年目

現在93haに水稲、トマト、メロン、マンジョカ、とうもろこしを栽培され、低地に池を造って養魚をやっておられる。

氏は日本では全く農業経験のない素人、建築業であった由。この広い土地にバイオニア精神で、農業のおもしろさを生活の中にとり入れるのが夢であるとか。原始林をバックに池、水田、畑地と独創的、精力的に綿密な計画のもとに着々と進められている風景は感歎の連続であった。特に農業自営者として、ぬげがち、おろそかにしがちな生産計画、経営計画がりっぱに記帳されていたのには農業教員として全く頭の下る思いがした。

ご家族は、ご夫婦と子供3人、現地使用人6人で子供はアスンシオンの高校と中学校へ行っておられたが、冬休みで帰省中、アスンシオンの学校の様子も聞くことができた。

最後に氏は。パラグアイの農業は発展する。○着想が大切である。○国民の要求する物をつくる。○水のない農業はなりたないとか更に資金が出来たので工業団地ができるどころへ今土地を購入しているので食堂経営を子供達にやらす予定とか、又労働力で現地人を使用する方法とか、いろいろ説明をうけ感心した次第である。

3家族を訪門して、「そこに山があるから」と言った登山家のことばを想い出した。なにも遠い南米に行かなくてもと考えがちであるが、広大な沃野があるから開拓者は出かけるのだ。困難は承知のうえである。いや、困難があればある程斗志が湧いてくる。平凡な山にもそれなりの味はあるが、登山家にとって山は高くけわしい程よいのだ。開拓者の道はけわしい。これらの移住者は高くけわしい道を登りつつあり、誠に力強く感じた。最初の訪門国アルゼンチンのブエノスアイレスに聞いたことは、パラグアイはひどいところで黒字経営の農家は少なくほとんどが赤字経営とか。ある人は1日でパラグアイに見切りをつけたとか。10年近く生活したがどうもおもわしくないで、ブエノスアイレスへ移住したとか。それは何故ですかと聞くと、パラグアイは物を生産しても需要が限られてすぐさま生産過剰になり価格が下がる。輸出するにしても、まだそれだけの対策ができておらず、文化生活も出来ず昔の労働移住の感があるとか聞かされていましたが、私の見たパラグアイ（他の移住地は分らないが）のイグアスはそんな暗いところはなく、すぐれた知識技術、経営能力、組織力を十分生かされてさらに開拓精神にあふれこの国の産業発展につくされているとともに中層部の生活として新しい息吹きを感じることができた。しかしパラグアイ、イグアス移住地の農家の最終目標は肉牛生産の畜産経営にある由、多大な資本を要する畜産の移行は容易でないで、現在はこうして、雑穀、野菜、養鶏、水稲などの農業形態が取り入れられているのはよく分るが移住18ヶ年経過して、まだ畜産経営が余り行われていないのは何故であろうか。又、森林を切り開いて次々と新しい農耕地をつくるのもよいが、定住するために一定の土地が栽培不能になると次の土地へ又何年かすると次の奥地を開拓する農業であってよいのか。いくら広い南米大陸であっても土地は有限である。広大な森林を伐採することだけでなく植林することが急務の感がする。豊かな水、台風もない、寒害もないこの恵まれた気候も森林の力が大であることを忘れてはならないとともに、輪作、連作体系を考えなければならないのではないか。かって略奪農業で、コーヒーやビメンタで成功したような甘い汁はありえないのではなからうか。農業をやるには何んと云っても土地が第一である。長い目で土地の利用、活用を考える必要があるとともに、生産物販売の組織化の研究が必要ではなからうか。私の見たイグアスは、気候地形、土質、水等自然条件、さらに交通の便利等経済条件にも恵まれ農業をやるのに最適地であると思った。移住者はいろいろ困難があると思うが新しい希望に向って頑張っしてほしいと願ってやまない。

移住者の訪問を終り、夜はパラグアイ農業試験場の職員による歓迎会が開かれ、今までの苦勞話、郷土の話、研修制度の話、今後の移住の考え方とおおいに語り、歌い、踊って楽しい一夜を過ごし、研修の宿泊室で眠った。

7月28日 朝食後、試験場、事業団の職員の見送りをうけ、車でイグアス・ホールへ向う途中拡大なイグアスの滝を見学した。

現地における私の感じは、文字通りとび歩きで、全く一断面のみであり、失言も多少あるかも知れないが、とにかく、憧れと、魅力、哀愁と同情、楽観と困難等々、悲喜交々とも言おうか……しかし日本人、日系人達の南米諸国に対する貢献はすばらしいものであり、益々のご繁栄を祈りたい。それにも優る、事業団職員各氏の努力により、共々に移住事業の完徹をお祈りする次第である。我々も国内に於て、基本的人権と人間尊重の立場から、大きな見込みと、大なる可能性を説き、人間一生の生路は生れた国だけでなく、「人間至る所に青山有り」を国際理解、国際認識と共に、若者達に普及伝播して行く責任を感じるようになった。又その覚悟が教師として勤めであると信じられるからである。本当によい勉強のチャンスを与えられ、深謝している。

サンパウロの印象

長野県北佐久農業高等学校

校長 宮坂 高

1 フェジヨンとシュラスコ

7月20日、ペラグアイでの日程を終えて、バスでブラジルへ向う。イグアスをたつて1時間余、国境の町プレジデンテ・ストロエスネルから国境を流れるパラナ河にかかる友情の橋を渡るとそこはもうブラジルである。



世界に誇るイグアスの滝

イグアスの滝の豪壮さに驚き興奮が体をかけめぐる。帰って話をするときどのように表現したら実際に判ってもらえるだろうか。そんなことを考えながら窓外の景色に見とれていると車は昼食のため食堂へ、大きな通りに面した日本で言えばドライブインといった店、何の飾りもない広い店内にはいく通りかのテーブルがおかれていて質素ながら清潔な感じの店である。白いシャツに黒ズボンのボーイが愛想よく迎えてくれる。昼食には少し早い時間であるが滝見物の観光客らしい人々で混んでいたが、案内のイグアス試験場の方々が顔見知りらしく、注文に応じてまずビールとブドウ酒が出され、ついで大皿にトマト、キュウリ、レタスそれに名前の判らない瓜類のようなものが山

盛に出された。食酢で味付けをして食べるらしいが、見た目にもキュウリは太くて種子の部分が大きく、トマトも新鮮さがなく、しかも盛り付けも無雑作で食欲は湧いてない。しかしブラジルでの初めての料理、ものは試しと一通り口にしてみたが大味の上塩気がないので口に合わない。イグアスの試験場での野菜は日本人が作った故か大変美味であったがと日本の野菜が思い出される。パン、ご飯とつきつきに料理が運ばれてくる中におしる粉のようないんげんらしい豆の煮物が出された。ブラジルに長く住み、イグアスの滝を900回以上も見たという案内のS氏にたずねると「ベジョン」(フェジョン)といいご飯にかけて食べるのだという。ブラジル人の生活には欠かせない料理であり、むかしは奴隷いの食べ物であったとか、体が温り、カロリーもあり、労働する者にはこれが一番だという。早速味わってみたがご飯はボロボロ、その上うすい塩味だけでおいしいとはとても言えない。仕方なしにパンに切り換えたが、これはかなりおいしかった。そのうちにボーイが長さ1m程の鉄の串に刺した焼肉を持って傍に立ち、各自のとり皿にそれを立てナイフで肉を切ってくれた、これがブラジル料理の代表シュラスコである。大変においしく日本では到底味わうことのできない味であり、ふん囲気である。次に出た肉を大きく切ってもらおうとすると、隣でパパイアから作ったとかいう焼酎をお代わりをして気持よく飲んでいたS氏が、「後から出る肉の方がおいしいから最初は少しにしておく方がよい」とささやいた。三番目に出た肉は脂肪が多く最初に出た肉とは大分ちがう。これはこちらに多く飼育されているセブ牛の背中のこぶの部分であるという。アルゼンチンでもパラグアイでもそうであったが、こちらの肉は日本の肉とちがって脂肪が少ないので脂肪の多い肉はおいしい。最後に出たのが骨付の肉。S氏の言うにはこれが一番おいしいと、肉を骨から剥がすようにして食べる。骨の付近にはカルシウムが多く、ここを食べることが肉食の人々が陥り易いカルシウム不足を防ぐ第一の方法であるという。そう言われた故か、油のにじんだ最後の肉が最も美味であった様に思った。気がついてみるとあちこちのテーブルでアメリカ人らしい観光客が肉の串を持つボーイを中にさかんにシャッターを切り、賑やかに笑声や歓声をあげている。

時間の都合もあり、食事に長い時間をかけないこともあったが、席を立った後を見ると、野菜もパンも大分残っている。味の点で野菜は好まれなかったのかも知れないが、シュラスコで腹いっぱいということであろう。満ち足りた思いでイグアスホールの空港に向う。



移住者とフォス・ド・イグアス国際空港前で

2 市内観光

7月21日、晴れてよい天気、朝食を済ませロビーで車の来るのを待つ。サンパウロでの一夜は日系人経営のホテルということもあり、客、出入りの人々もほとんど日系人で、日本にいるのではないかとの錯覚に陥る。セラード開発(ブラジル農業研究協力事業)に事業団から出向している同御の小林氏が突然訪れてくれたが時間が余りなく、ブラジリアでの再会を約して別れた。

8時30分、バスで市内観光へ、ラッシュアワーなのであろうか車の波である。アルゼンチン、ブラグアイではいかにも旧式といったボロ車が目についたが、ブラジルの車はみなすばらしく見え、フォルクスワーゲンの多いのが目立つ。説明によれば60%のシェアを持っており、その他フォード、ベンツ、フェヤットが多く、すべて国内生産できびしい輸入制限がなされているという。日本からはトヨタが進出しているがジープを主として生産しており量は少ないようである。ただ白バイ用のオートバイはホンダとスズキであるとのことである。

車は間もなくイビランガの独立記念塔に着く、1922年ドン・ペドロが「独立か死か」と叫んで独立を宣言した場所に建てられた巨大な塔で、多くの兵を従え、剣を天に向かって振りかざすドン・ペドロ一世の像がある。大理石の台に黒の彫刻、澄み渡る空に調和して大変に美しい。あたりは人影もまばらで、台石にのって歌う若い女の子達の合唱の歌声が風によって時折聞こえてくるのみである。

ついで車はパウリスタ通りの高層ビル街を左に眺めながらサンパウロ州立総合大学に向う。500ヘクタールという広大な敷地に近代的な建物が十分な間隔をおいて建てられており、日本の大学の

キャンパスの概念では想像もできない広さである。大学都市として構内での学業等にすべて大学が管理しており自治区のようになっていたとのことである。

日系人は大変教育に熱心であり、このエリート大学の学生の12%は日系人である由。一世が農業移住者として勤勉辛苦に耐えてその地位を築き、子弟の教育に力を入れて農業から他分野へと階層移動を図った。現在、二、三世に世代が移り、日系人の活動舞台も政官界、実業界とあらゆる分野に及んでいるという。それはたしかにすばらしいことだ。しかしそれでは農業とは？、広い大学の一角に立ってそんな疑問がふと頭をかすめた。

ブタントンの毒蛇研究所は小高い丘に木立に囲まれて静かなただずまいをみせていた。広大な国土と熱帯という条件のもと数多くの毒蛇がおり、農業者を中心にその被害が大きかったため、今世紀はじめビダル・ブラジル博士によって創立されたたまものである。以来各種の血清、ワクチンが製造され、現在では犠牲者が激減しているという。数多くの標本をみて毒蛇の種類の多いこととともに、大人のこぶし程もあると思われる毒蜘蛛にはびっくりした。ガラガラ蛇の毒液採取の実演を見て、車は丘を下ってパウリスタ通りへ、途中住宅街を通ったが、坂道を下る際、ときどき車が除行して障害物乗り越える。工事をしている気配もないのにと思っていると、車がスピードを出して走らないようにするため、住宅街等では道路に段差を設けてあるのだと案内人が説明してくれた。ブラジリアの大学の構内もそうであったが、面白いアイデアであると感じた。

パウリスタ通りは高層ビルの街、道路の両側に揃比する近代的建物は偉観という外はない。サンパウロの高層建築はニューヨークに次ぐといわれるとか。日本商社、銀行のそれも数多くあり繁栄ぶりが偲ばれた。

レプリカ公園の賑わいを横にみて、車はオランダ系の宝石店へ、3階の工場で研磨、細工の工程を見学して1階のショールームで製品を見せてもらう。生活に無縁とは思いつながらトルマリンの青の輝きには魅せられた。

3 日系人農場見学

7月22日、長野県人会の役員の方に、われわれ5人とサンパウロ市西方150Kタツイ市にある県出身の滋野氏の農場を見学させて頂くことになり、9時過ぎホテルを出発する。

郊外に出ると片側二車線の自動車道路が延々と伸びている。日本の道路に比べて車線が広く、駐車用の路側もあるので大変に広い。しかも中央の緑地帯が場所によっては100m以上ともあるので一方通行の道路二本と考えた方がよい。

車のスピード制限が80Kmとのことであったが、少し前までは120Kmであったとかで走り去る車のほとんどは130～140Kの猛スピードである。折日から晴天の日曜日、真冬とはいいながら気温は22℃、絶好の日和とあって郊外に向う家族連れの子が多い。サンパウロ付近は海拔6～800mの

高原地帯で、なだらかな丘陵と広い草原が続き、その間を走る道路が絵のように美しい。ところどころ丘陵を切り拓いた崖にはテラロッサ特有の赤い地肌が鮮やかでつぎつぎと変る風景はじゅうぶん眼を楽しませてくれる。

3時間程でタウンイ市に着く。いかにも近郊の小都市らしく静かで、あちこちに咲くジャカラダの紫色が大変美しい。昼食を済ませて農場に向う。滋野農場は経営面積500ha、養鶏60万羽、乳牛1,350頭、オレンジ250haの複合経営である。最初に集荷場と出荷施設を見学する。鶏舎からトラクターで運ばれた荷は洗浄、乾燥後重量別に分けられて箱詰されるのであるが、すべて機械化されており、15、6人の原地の若い女の子達が懸命に働いていた。滋野氏によればオランダ系移民の子達であるというが、面長で彫が深く、印度系を思わせる美人が多かった。鶏舎は一棟6,000羽、10棟1群6万羽単価で2～300m離れて建てられており、女の子6人で担当しているという。冬が暖いせいか鶏舎の作りは簡単であるが、様式は日本のものと変ったところはないようであった。現在1日30ダース入1,000箱位出荷しているが、原価が安いので利潤は少なく鶏糞だけが利益だという。にわとり1羽が年15Kの糞を生産する。K当り15Cr(約140円)で販売できるが、この農場では日本的発想で酪農と補完し合っている。この地方の農業とくに酪農でこわいのはセッカという6～8月の乾燥と霜であり、これによって牧草が枯れてしまうので、1アルケール(約2.4ha)当り平均2頭の牛しか飼育できないという。しかしここでは鶏糞を牧草地に還元して土地を肥やし、牧草の収量を高め、それをトレンチサイロにして乾期の飼料不足を補うので1アルケール当り15頭飼育しているという。折よく長さ2～300mにも及ぶフリーバーン式牛舎にトレーラーでサイレージを運搬し給餌する状況を見学できたが、育成牛、搾乳牛とも健康そのものであり、秘乳量も高いとのことであった。ただ将来の飼料問題を考慮して、牛を系統のよいものに切り換え、飼育頭数を減らしていく予定とのことであった。

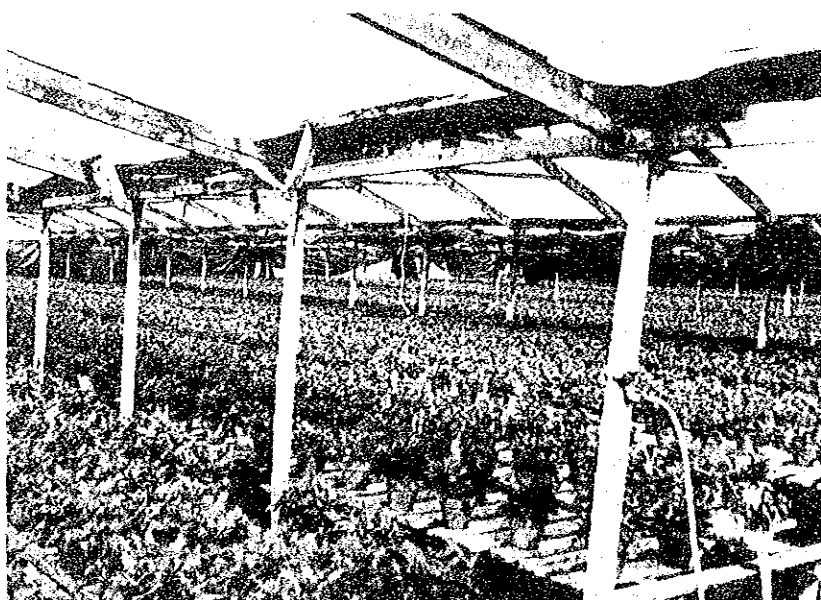
250haのオレンジ園、畦の長さが3～400mもあろうか、ちょうど収穫期に入っている品種もあって、緑と黄のコントラストが雪国信州の私には強い印象であった。そして甘酸っぱい味と高い香はいまも忘れることができない。

4 移住地と関係施設をたずねて

7月23日、昨日の青空とはちがい霧かもやのかかった朝、太陽が赤く感じられる。8時2台の車で工業移住センターに向う。中央市街地から郊外に向ってすすむにつれ、庶民の生活の臭が感じられる風景となる。工業移住センターはそうした鮮やかな郊外に近い一角にある。川端所長から概況について説明をうける。現在の若い日本人について、根性というか生きる力の不足が感じられる。いまの教育はどうなっているのかと厳しい言葉が出された。また工業移住者の就職企業は外資系、日系コロニア、進出企業とあるが日系コロニア企業に就職する場合が多く、この場合問題となるのは

言葉の障害であるという。従って中程度の技術者では言葉の障害を考えれば現地で採用した方がよいということになる。ここに現地での技術研修の必要性があり、今後取り組まなければならない課題であるという。

時間がないまま施設を一通り見せて頂き出発、車はサンパウロからリオに向ってゾトラ街道を東に進む、幹線道路の故か車の往来がはげしい。道路沿いのユーカリの木に白いペンキが塗られているのに気付く。夜間の自動車運転のための安全対策であろう。仕事はゆっくりだが車に乗ると人が変ると言うブラジル人のこと、スピードによる事故が多いのではと感じた。サンパウロから45MK、近郊花卉園芸をなされている荒木氏の農場に着いたのは10時半であった。当主の荒木氏から説明を聞く。たんとと語られる話のうちにも苦難を乗り越えて来られた気魄が感じられた。この土地を選ばれた理由の間に對し、幹線に近いこと、労力が確保し易いことの次にここは土地が安かったからと言われた。低湿地であったものを自力で暗渠排水をし、ここまでに仕上げたとのこと。ポットマム、葉物類のすばらしい出来ばえもさることながら、発想のすばらしさとその努力には頭の下る思いであった。ちょうど休憩時間らしく日向にたむろして物めずらしげにわれわれを眺めている現地人労働者のあどけないとも言える表情が対象的であった。農場を出る際注意して見ると入口付近は湿地であり先程の話が納得できた。



サンパウロ郊外荒木さん(山形県出身)宅のフレーム内のポットマム

車は次の訪問地豊和工業に向う。暖かいとは言え真冬、油桐らしい葉の落ちた林にちよっぴり冬枯れの感じを受ける。12時間モジ・ダス・クルーセス市の豊和工業に到着、茶褐色の街という感じの中でここだけは植込みがあり緑が美しい。昼食事ということで食堂に案内され昼食をご馳走になる。ここでまたフェジョンが出された。「このフェジョンは美味しいですよ」と言われ、それではと味わってみるがやはり口にあわず、サラダとソーセージでようやく済ます。

昼食後、工場長から概況の説明を受け場内を見学する。日系企業と政府が出資し、現地企業との共同出資で織機と部品の生産をしている。面白いと思ったのは労働条件で週48時間の週休2日制、週48時間勤務すれば日曜日にも有給であるという。平均給与は月8183クロセイロ(約9,000円)賃金は低い年次休暇制度などを含めて労働条件はなかなかよいと思った。交通法規をはじめ法制全般に亘って先進国に範をとっているが、運営の実際がそれに伴っていないのがこの国の現状であると言った人がいたが、その一端を見た感があった。

車は最後の目的地ジャカレイに向う。農業移住センターは南に山を背負った川岸にあり、宿舎の背後の丘にいろいろの作物が見本的に植えられていた。ここでコーヒーの木をはじめてみた。早ばつのためとかで熟さず黒変した実が多かったが赤い実を手にしてしばらくその感触を楽しむ。竹内所長さんは私が県教委に居たとき、県の事務所におられたので旧知の仲、日本に帰って居られた奥さんが子どもさんの夏休みを利用して昨日こちらに来られた由、そのせいか説明される所長さんの表情の明るかったこと。時間の都合で移住地には行かず、センターの丘から展望する。現在48戸の移住者が養鶏、花、野菜、養豚、ぶどう栽培等の経営を行っており、恵まれた経済立地と霜がないという自然条件のもと、安定した経営が行われているとのことである。短かい冬の日が西に傾きかけ、日のかげった移住地から一すじ上る煙が横に広がり漂う、ほのかに聞こえるにわたりの声に平和な生活の響を感じつつ暫し思いにふけた。

観光のメッカ、リオから世界に誇る理想首都ブラジリア

大分県立宇佐農業高等学校

教諭 松山 尊

(1) リオ・デ・ジャネイロ

7月25日(水)9時50分、リオのガレオン空港に到着、出迎いのバスにてリオの市内へと向かった。空港より、リオ南部の景色は、平屋の家が多くサンパウロ郊外を思わせたが、トンネルを一つ越えると北部の様子はガラリと一変し立派な高層ビルが建並び、まるで別の都市へ来た感じであった。早速、国際協力事業団を訪問し、事業団の事業内容を伺った。この事業団は、ブラジル国内の事業団の本部であり、一般支部の対移住者業務のほか、政府折衝等、総括的業務を併せて執行している。ブラジル連邦政府のブラジリア移転に伴いブラジリアにも出張所を開設している。同支部が管轄する地域は、リオデジャネイロ州、エスピリット州及びミナスジェライス州の3つの州で66万戸に及び、日本の約1.8倍にわたっている。

ここでは戦後の移住者がほとんどで一度他地域での経験を経た人達が多く、歴史は浅いが営農状況は良好のことであった。それに現在進められているセラード開発の拠点にもなっている。

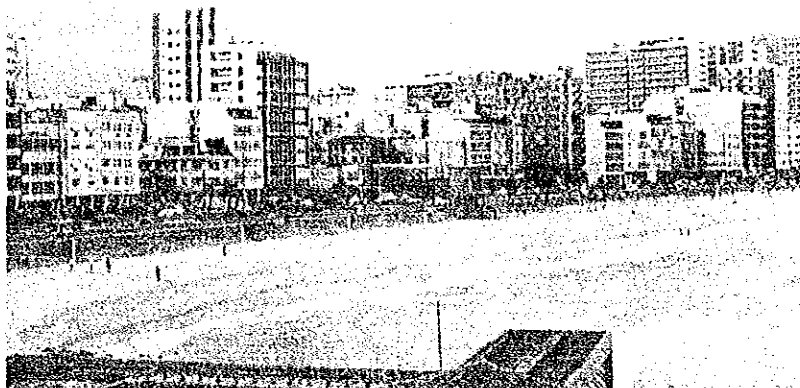
進出企業関係にしても、南米最大の石川島播磨ブラジルをはじめ約70社が進出し、石播では5,000人の従業員が働いており、派遣日本人が200人程度いる。その他の企業に働いている日系人も330人程度あり、市内には1,700人の長期滞在者が住んでいる。そのため日本人学校もあり、学力程度も日本の学校と同程度で、日本語でやっているそうである。

リオ市近郊には大移住地はないが、セラード等については、第2分譲的なものが多く、ここでの人々は農業ではトップレベルの技術をもち、大豆、その他の穀類を主体とした大規模経営を行っている。現在でもなおブラジルでは穀類が不足しているとのことであった。

私たちは事業団で以上の説明を聞き、コバカバーナのアトランチカ通りにある、ホテル・カリフォルニアに着いた。ホテルの前のビーチには、ちょうど冬休みのためか、若者や子供たちが水着姿でボール遊びや海水浴をしていたが、2～3時間前までは背広の下にセーターまで着込んでいたサンパウロとは大きな違いで、何んだか別な国へでも来たような錯覚を感じた。

昼食後、市内観光に出かけたが、さすがにリオは世界三大観光地の一つであるだけに港の景観、独得の形をした山々や、海と湖、きれいな砂浜、天気は快晴。早速、有名なコルコバードの丘に登山電車にて登った。ブラジル独立100年祭を記念して1922年～1931年にかけて建立された高さ38mのキリスト像が、両手を大きく広げて、私たちを迎えてくれた。このキリスト像はブラジル国民の誇りであり、「ニューヨークの自由の女神」か「コルコバードのキリスト像」かといわれるほど有

名であると自慢していた。



コルコバードの丘よりを望む、イパネマ高級住宅街と海岸



コルコバードのキリスト像

この丘からは、リオの街が一望視され、その景観は、海と河と湖とそして街とが突によく調和し、絵葉書そのままの美観であった。帰りには、イパネマ海岸の美景と夕日に輝くキリスト像を眺めながら、更にフラメンゴ海岸を通りホテルに着いた。

案内の清水さんのお話では、ブラジルの人はいずれも“一度はこのリオの街にマンションを持ちたい”というのが念願だそうである。

夜は事業団の方々に心温まる夕食会に招待をいただき、ブラジル国情、移住状況、日系人の業績等をお聞きしながら夜の更けるのも忘れるほどであった。

7月26日(木)朝7時にホテルを出発、再度コルコバードのキリスト像を仰ぎながらガレオン空港に向かった。途中の広場では朝早くから若者のサッカー練習風景を何組もみかけた。

(2) ブラジリア

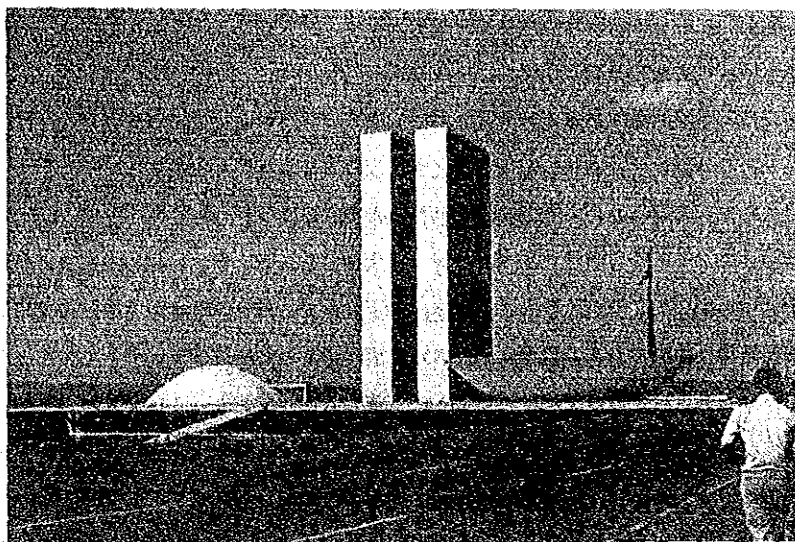
11時05分頃、ブラジリア空港へ到着、この日も快晴。機上で眺めると赤い広野が眼下に広がり、その中にジェット機型のブラジリアの街と、それをとりまく青い湖がみえてきた。機は大きく1周し、空港へ着陸。バスでホテルへ直行したが、ブラジリアの道路の広いのには驚いた。ホテルで昼食後市内見学、国会議事堂を中心に三権広場の両側に整然と立ち並ぶビル、それは理想都市をめざすブラジル国の粋を集めたもので、官庁街、同アパート街、銀行街等、それぞれに整然と区画され、それらに通ずる道路はすべて立体交差であり、道路はほとんどが車道のみで歩道はみられない。各建物の一階はすべて駐車場になっている。

ブラジリアの人口は120万で、市の中心部に70万人が住んでいるが、ここでは公務員と学生が大多数を占めている。1960年理想の首都をめざし、海岸より1,000 Km 海拔1,100 mの内陸高原に着工し、現在では50%の出来上りである。その後の工事も順調に進められているが、このような綿密な計画のもとで造られる都市でも、出来てみれば手直しの必要もあるとのことである。如何に人間の理想の追求が難しいかわかるような気がした。

国立教会、国会議事堂、大統領官邸を見学したが、視野全体が広いためか、いづれの建物もあまり大きくは感じられなく、近づくと、いづれも堂々たる立派な建物ばかりであった。観光客も多く、教会にしても議事堂にしても誰でも自由に出入り出来るのには驚いた。教会は屋根もガラス張りで非常に明るく、外の周囲の池の反射がきれいにそのガラスに輝き、雨の日にはその雨音が音楽を奏でるそうである。教会の見学者も多く一語に写真をと云えば喜んで一語にはいるブラジル国民の明るさ、非常に好感がもたれた。広場には美しいドライフラワーの露店があり、赤黄青等の原色の種類のフラワーが並んでいる。この乾燥地を利用してのドライフラワーで、発祥の地だそうである。

議事堂、大統領官邸は総大理石で出来ており、国会議事堂の屋上には、中央にH型の塔と、右側下院の屋上には盃型の大きな皿と、左側の上院の屋上にはおわんを伏せた丸いものがある。H型は、

仁義、榮譽、礼節を表わしているとのことである。



ブラジリア 国会議事堂



ドライフラワーの露店

下院の盃形は議員数420名でガヤガヤと論議をたたかわすので声が上に抜けるようにしてあり、上院は議員数66名で老令者が多いので声が逃げないようにしてあるとの冗談の説明もあった。

緑の芝生を前面に白亜の官邸も素晴しく、その周りには青々と水をたたえた人工湖、遠くにはセラードの地平線、雄大そのものであった。

この人工湖は、周囲80kmで日本の芦ノ湖と同じ大きさでブラジリアの市内を包むようになっている。4月～9月の乾期には、空気の乾燥がひどく、夜などは眠ることが出来なかったそうである。そのため気候をやわらげるため人工的に造られた湖だそうである。

市内には30,000㎡の広大な敷地をもつブラジリア大学があった。学生数12,000人、アパート住いで自動車で通学している。校舎(教室)は平屋、地下室付で、長さ800mが2棟並んで建っていた。その他実験棟等種々の建物があり立派に整備された大学であった。

公務員等のアパートは1棟のアパートに60～80家族が入居しており、1戸が3つの部屋と女中部屋、応接室、台所、便所2からできており、我国のアパートに比べると羨ましい次第であった。また1つの団地には公園1、2つの団地に商店が2の割合で街が形成されているとのことであった。商品はほとんどがサンパウロより送られたもので、そのためサンパウロより物価は3割程度高くなっている。最後にテレビ塔よりブラジリアの全景と地平線に広がるセラードの雄大さを再確認し、更に立派な日本大使館を訪問し、夜は事業団の清水さんのご好意により湖畔のレストランで美味しいシュラスコ料理をいただきながらブラジリアの研修を終った。

〔感想〕

私の担当はリオとブラジリアであるが、それだけを見てもブラジル国の状況全体がわかるようである。それはブラジル国民の意気と熱意である。いや、日系人の熱意かも知れない。現在では発展途上国といわれているが、先進国に追いつけ追い越せという意気込みがひしひしと感ぜられ、私には圧迫感さえ覚えたほどである。

リオを世界一の観光地に、ブラジリアを世界一の首都に、セラード、アマゾンを開発し、世界一の農業国に、更に日本と同様ブラジルでも石油不足となっているが、その代替エネルギーとして原子力は勿論、世界に先がけて豊富な農産物を利用してアルコールを精製してこれに替えようとしている。現在でもガソリンの中に10～20%を混入している。

来年は官公庁用の車は100%アルコール車にするのだと意気込んでいた。

今は貧富の差も大きく、文盲も多いと聞いているが、急速に進展しつつある教育熱等をみて、将来のブラジルは素晴らしい国になるであろうと痛感した。

あの広いセラードやアマゾン開発に今も日系人が取り組んでいるが、資源の少ない日本が、日本人のすぐれた技術を天文学的広さのある大地の開発に発揮し、ブラジル国の発展と、ブラジル国、日本国の交友を深める機会は今をおいてないのではないかと痛感した次第である。

北伯農業におもう

山形県立新庄農業高等学校

教頭 柿崎 重美

1 ブラジリアからベレンへ

7月26日、午前6時、澄みきった大地に赤い巨大な太陽が、セラード地平線にくっきり顔をだしている。海拔1,100m、冬のブラジリアのすがすがしい朝の情景である。次の研修地ベレンに向うため、8時、ホテルを出た。ベレンに着いたのは、午後2時30分、4時間の飛行であった。ベレンの上空から大アマゾン河と島中水牛の牧畜が盛んな事で有名なマラジョー島（日本の九州と同じ位の面積）の眺観を期待したが緑林に包まれた大陸の一端と多数の島が目に入っただけで、島という感じはなかった。大アマゾン河も見ることができなかった。トラップを降りた瞬間、肌に焼きつく日射に、これが赤道直下の太陽のエネルギーかと感じとったのは私一人だけであろうか。輝ら輝ら光る陽炎から、20年前の教え子、大江充子さん夫婦の姿が見えた。異国を視察して2週間目、そろそろ望郷心がついていた時なので、その感激はひとしおであった。（大江さんについては後述する）国際協力事業団ベレン支部の案内でベレン市の一番立派なホテルに旅装を解いた。ベレンはマンゴーの市とも言われているとおり、市中には20m以上もあるマンゴーの並木がうっ蒼と繁って見事な樹影を広げ、暑気よけになっている。また、マンゴーの成熟期には樹下の両側に並んでいる自動車にマンゴーの実が落ちて思わぬ被害があるとか、とにかく、熱帯の自然を生かした美しい街であった。

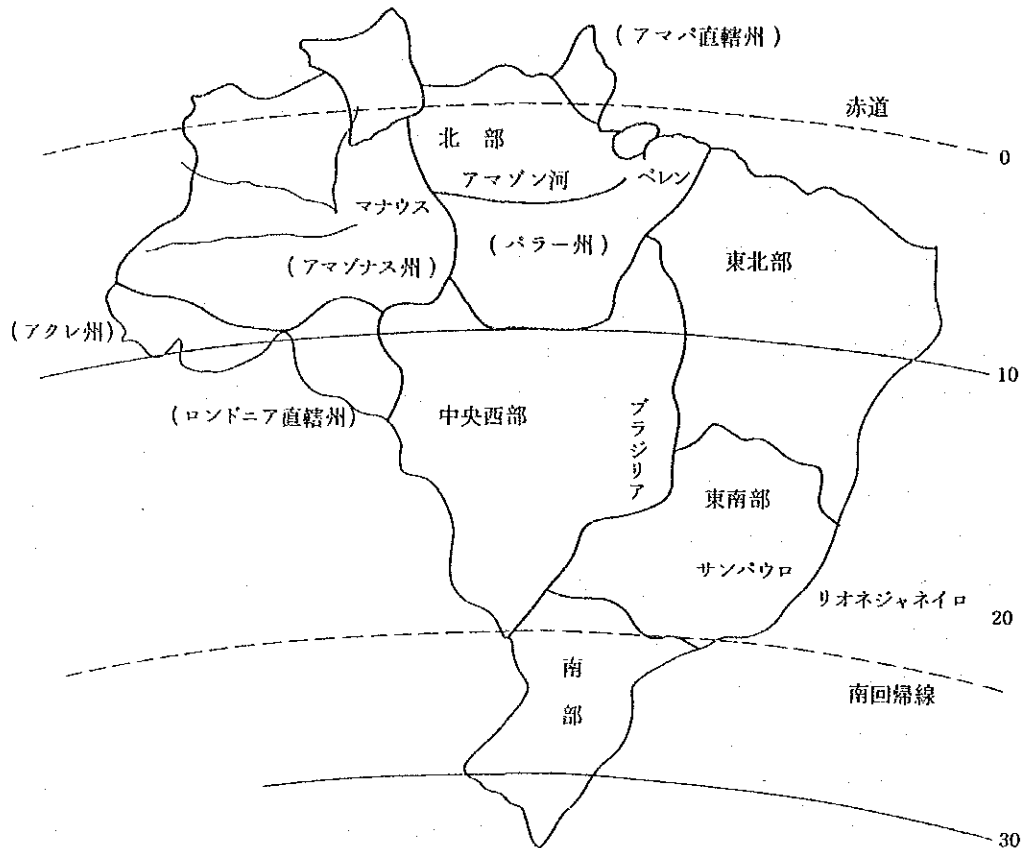
2 アマゾンの農業を聞く

国際協力事業団ベレン支部を訪問、支部長さんより管内の概況説明があった。その一部を紹介しよう。

アマゾン河流域の農業をアマゾン農業といっている。アマゾン河はペルー領のアンデス山中にその源を発し、本流の長さは、6,400Km、流域面積は世界一広いそうだ。アマゾン河口より、138Kmの地点にベレン市、海拔10m、又1,851Km上流にマナウス市があり、海拔21m、しかも1万t級の外洋船が入港できるというのだから、いかに広大な平坦地で、農耕可能な土地であるかがわかる。

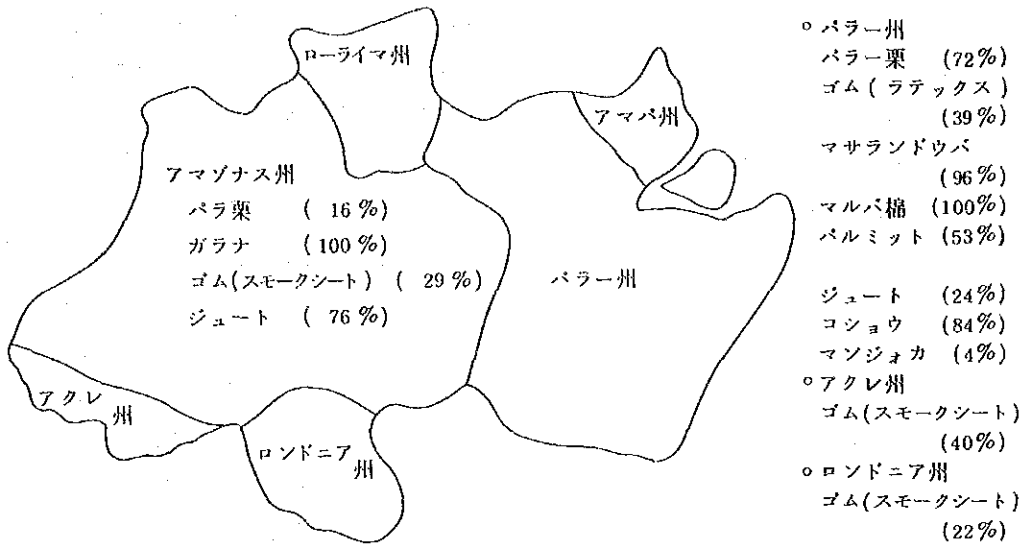
ブラジルの地方区分とアマゾン流域の気候

(ローライマ直轄州)



気候…赤道の南北にまたがる高温多湿の熱帯多雨林型気候で12～6月が雨期，7～11月が乾期である。
ベレン市の年間平均気温は 27.1℃，日較差平均 10.8℃，湿度 88%。

アマゾン農業は土地利用の形態から，肥沃な土壌を有する，ヴァルゼアの農業とやせ地，いわゆる，テラフィルメの農業と両方併せもつ農業に区分される。ヴァルゼアの農業はアマゾン河の浸水地帯で行われるもので，増水期の氾濫水により堆積された土壌で肥沃であるが周年栽培はできない。主な作物は，米，豆類，トウモロコシ，そ菜，ジユート，パルミット，そして牧畜である。テラ・フィルメの農業はアマゾン地域の98.5%を占める大部分が原始林となっている。主な作物は，ゴム，パラ-栗，コショウ，マンジョカ，ガラナ，マルバ棉等である。アマゾン農業の各州の特産物は下図の通りである。



()内数字は全国生産に占める率

日本人の分布状況は、パラ州に16集団、1,349戸数、アマパ州に3集団、31戸数、アマゾナス州に6集団、230戸数、ロンドニアに2集団、37戸数、アクレ州に2集団、8戸数、ローライマ州、1集団、計1,667戸数、8,337人の日系人の方々がそれぞれ活躍されている。

パラ州(一部)の集団ごとの農家経済状況をあげてみると、これは1戸平均で1977年度の調査である。

単位：千円

	農業 租収入	農業 経営費	農業 所得	農外 収入	農外 支出	農外 所得	農家 所得	祖 公 税 課	家計費	余 剰
第1トメアスー	10,176	5,262	4,914	447	103	344	5,257	184	1,744	3,329
第2トメアスー	6,449	4,164	2,285	294	71	223	2,508	100	1,158	1,250
アカラ	11,144	5,948	5,196	136	21	115	5,312	61	1,820	3,430
アルタミーラ	6,044	4,251	1,793	574	150	425	2,218	6	1,020	1,192
グァマ	15,750	8,574	7,175	403	216	187	7,363	43	1,493	5,827
モンテアレグレ	5,255	3,514	1,741	501	666	△165	1,576	79	1,075	422
サンタレーン	3,623	3,214	409	2,668	245	2,404	2,813	46	1,353	1,414
ベレン近郊	20,933	15,421	5,512	160	0	160	5,672	176	1,785	3,711

アマゾン熱帯である。これからのアマゾン農業（北伯農業）は、熱帯農業でなければ産出できない特産物を開発すべきである。現段階では、ビメンタ以外の農産物は市場が人口の密集地である南伯であるから、距離的（2,000 Km～4,000 Km）にも時間的（輸送時間、48時間）にも南伯農業に比して条件がわるい。対抗策として、ジュース工場とかオイルパーム（ヤシ）の搾油工場等があればと切実に訴えられた支部長さんが印象的であった。

3 トメアスー

27日、朝8時、ベレン支部長さんの案内で総領事表敬訪問をした。石川総領事さんは大変律義な方とかで、暑い朝であったが、ネクタイ姿で緊張してでかけた。総領事さんは、昨夜、ブラジル大統領のベレン到着歓迎夕食会に外国人ただ1人の招待客として参加したそうで、日本へのブラジルの期待が表われているように感じた。総領事さん、曰く、日本の青年に教育してほしいこと、1つは、言葉をマスターすること。もう1つは、経営能力をそなえること。海外に雄飛しようとする日本青年ならば当然のことであろう。9時30分、ベレン支部山中さんのバス案内で一路南へ180 Km、黒ダイヤの村、トメアスー植民地に向った。トメアスーへの道は州道に入るとかなりでこぼこであった。道の両側はアマゾンの原始林がうっ蒼としている。開拓された所々に鉄道の枕木を立てたような杭（ビメンタの支柱）が、空しく散在されている情景が気にかかった。午後2時頃、トメアスー行政街にて弁当を開いた。ここはグアマ河支流の村で、バス道路開通以前は汽船の発着所でもあった。第2トメアスー地区の高橋農場を見学した。ビメンタ単作経営から多作物経営そして複合経営と経営形態を変えているようだ。理由は異質でも、日本農業と同様な問題をかかえているように感じた。それは、夕方アマゾニア熱帯農業総合試験場の説明で理解できた。

ビメンタに未だに解明されていない病原菌が大発生していることである。永年作物であったビメンタが植付2年目から収穫して3年位で根腐病、線虫病により全滅する。ビメンタを輪作しながらカカオ、ガラーナ等の混作で補強する多作物経営、複合経営に変わりつつある。場長の提言は、入植10年目にして、50haの総合経営により、2,000万円の粗収益をあげることであった。私達は分宿することになった。私は、トメアスー産業組合相談役の押切他男氏宅（山形県出身）にお世話になった。その夜は、文化協会々長大沼春男氏、会計の押切正三氏（いずれも山形県出身）の3氏と郷土話し、トメアス歴史等を拝聴し感銘した。28日のすがすがしい朝、奥様のたてた、コーヒーをすすり、200haの所有地の1部である庭園を見学させてもらった。竹、松、梅、羊歯類、ラン類等、永年かかって日本から運び再植したものが多いようで、押切氏が入植してから今日までの苦難の足跡が刻まれていた。押切氏は当地域の指導者として、次の経営形態を奨励していた。それは、2,000羽養鶏、ビメンタ、5,000本（5ha）5年輪作、カカオ、10ha（永年作物）。これに、10人位の共同で乳牛10頭（畜舎飼育）、これで粗収入、1,000万以上である。養鶏と畜産は収益をあげる目的では

なく、中間産物を利用して、地力の維持増進をはかるのだと力説しておられた。ジブシー農業から定着し安定した複合経営を考えておられるようだ。私達は午前中、トメアスー文化協会会館、産業組合を見学した。アマゾン農業発展の基盤づくりに、日本人先駆者の業績を継承し、誇り高く、しかも祖国日本農業の将来等にも深い関心を寄せながら、大活躍なされている入植者の方々に感動し、敬意を表したい。トメアスーの今後のご発展を祈りつつ乗車した。帰路、津久井さん(群馬県出身)の農場を見学した。津久井さんは、32才、昨年、神奈川県出身の奥様を迎え、ピメンタ、マラクジャ、パパイヤ、ハワイメロン等と14haの開拓地を多作物でフルに活用し、その実をあげている。優秀な経営能力のある好青年である。ペレンについたのは暗闇の午後8時であった。



カカオ・ピメンタ(こしょう)の混植栽培

世界のピメンタ(胡椒)国別生産高(1973年)

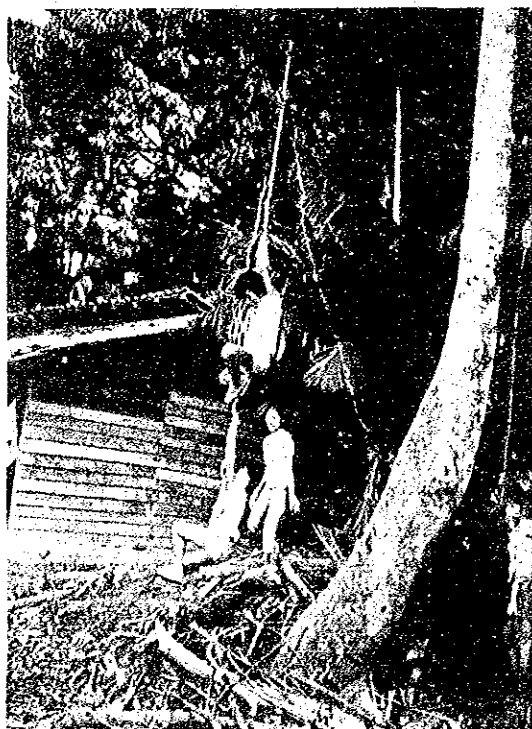
単位：トン

国名	生産高	国名	生産高	国名	生産高
インド	36,000	ブラジル	14,000	ビルマ	2,000
インドネシア	14,000	セイロン	4,000	フィリピン	1,000
サラワク	28,000	カンボジア	2,000	その他	2,000
ジョホール	3,000	マダガスカル	1,000	合計	103,000

4 大江夫妻よ頑張れ

予定時刻より3時間も遅れて午後8時過ぎ、トマスー視察からベレンのホテルに戻った。

私は約束の県人会ベレン支部の歓迎会に出席するため、鈴木一郎氏宅に向った。(鈴木氏宅は立派なホテル)。会場には15人程の方が豪華な日本料理を前にして、待っておられた。早速開会となり、旧知のように楽しく話し合うことができた。移住者の方々は、祖国日本の景気、農業政策等に関心があったようだ。翌日の29日は日曜日なので、私は前述した、教え子である、大江夫妻宅に泊まることにした。夜10時30分、歓迎会が終ると、再び、ベレンの南方、120 Km、グァマ連邦政府植民地にむかった。真夜中1時、大江宅についた。この地は、アマゾン河支流グァマ河流域の開拓地で途中道路は政府が入植者受入れのため切り開いた、デコボコ道路、西側は、ターザンを想像させるような大密林地帯であった。24戸が入植しているそうであるが、隣り同志は、ジャングルを5 Kmも離れているそうなので全く孤立した生活であった。トラックのライトを頼りに自家発電のスイッチを入れた。その瞬間、文明の力により、丸太家屋、大型トラクター2台がくっきりと目の前に飛び込んできた。それと同時にテレビの音、子供達の出迎えもうけた。この光景は脳裏からはなれない。家屋は、応接間、各個室、日本式風呂、水洗トイレと流石ジャングル・パトロンの文化生活様式であった。朝、ジャングル特有の囁りで目がさめた。熱帯グァマのすがすがしい朝に太陽光線の強さを感じた。大江夫妻は高校生の娘、小学生の息子2人の家族で、今は冬休業で家族そろっての楽しい生活であった。入植して17年、大江夫妻のアマゾン農業雑感を記してみたい。



ターザン遊びにふける大江氏の子供
(うしろの建物は労働者の宿舎)

パトロンとして現地人の雇用労力をどう利用するか、それには、パトロンの権威を保つこと、独身の方が雇用しやすい等々、現地人の性格をどのように把握するかであった。政策に関心を持つこと、前大統領のときは（4年前迄）、農業貸付金に40%の補助制度があった。ブラジル発展は農業振興の道が大切である。また、インフレにどう対峙するかであった。教育であるが、日本人は頭が良いので、教育には非常に熱心である。ブラジルは学歴を重視する国柄なので、アマゾンもあらゆる分野に日系人の進出がすばらしい。自分達の子供も他に進む公算が強いが、私達夫婦は農民として農業の限界に挑戦してみると力説なされていた。広大な土地に挑み、思う在分、自分の農業をやってみるには、このアマゾンでの農業が日本人にぴったりしているのでは……。大江夫妻は、米作、ビメンタ、そ菜、カカオ、養鶏と多作物経営をやり、特に農業機械を合理的に活用し又現地人をうまく雇用している優秀農家である。10年後、あのジャングル地帯がトメアスーと同じような集落になることを確信したい。大江夫妻よ、ご健全で頑張ってください。21世紀のアマゾン農業の発展したすがたをこの体でみたいものである。

ブラジルの自然

宮城県農業高等学校

教諭 太田 勝 昭

1 ブラジルの位置及び概略

ブラジルは北緯 5° から南緯 34° 、西経 35° から西経 74° に広がるほぼ四辺形をし、チリを除いた南米諸国と国境を接している。その面積は約 851 万 Km^2 で、世界陸地総面積の 5.7% を占め、南アメリカ大陸の実に 45% を占めている。これはソ連、カナダ、中国、アメリカ合衆国に次ぐ大国で、日本の 23 倍の面積である。この面積に日本よりも若干少ない 1.08 億の人々が居住している。（ 1976 - 日本は 1.13 億）。しかし、人口増加は 28.3% と高く（日本は 10.8% ）、このまま増加すると、 3 年後には日本を追い越す人口になるものと思われる（推定 1.1698 億）。

851 万 Km^2 の面積のうち、 $2,000$ m を越す山地は数える位しかなく、ほとんどは 500 m 以下の平地及び台地、高原である。しかし、交通上又は気候的な影響を受け、未開発の地域が広がり、国土の 60% は森林で、耕地として利用されているのは 4.3% に過ぎない。放牧地や牧草地として 20% 利用されているが、日本とは異なり、全くの放し飼いで、 1 頭飼育するのに広大な面積を必要としている。

このような国であるため、人口の可容能力は大きく、未来の国であり、開発のために、より多くの人々を望んでいる。

2 ブラジルの地形

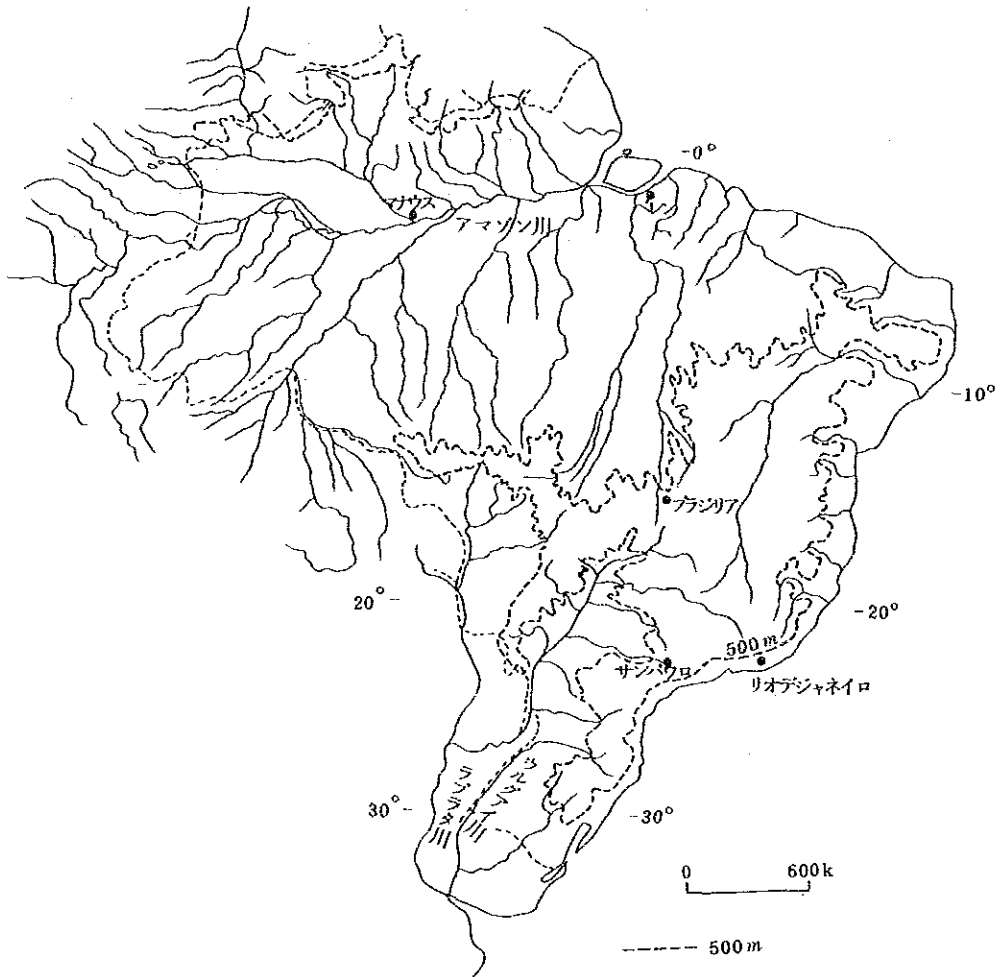
ブラジルには高峻な山地がなく、 500 m 以下の地域が国土の大半を占めている。地形的にみると、アマゾン川流域の 200 m 未満の低地と北部ギアナ高地に続く 200 m 以上の高原及び中南部に広がる、山地を含んだ 200 m 以上のブラジル高原とに分けることが出来る。これらはアフリカを中心とする、東はオーストラリア、インド、西はブラジルまでの陸地は同じ地質構造をもつゴンドワナランドとよばれるひとつの大陸であったといわれる。

(1) アマゾン低地

ほぼ 4°S を軸として東流するアマゾン川は世界最大の 605 万 Km^2 の流域面積（日本一は利根川の 1.7 万 Km^2 ）をもち、ナイル川に次ぐ $6,300$ Km の長さをもつ長大な河川である。この低地は上流でやや幅広い扇状形をもち、川口より $2,900$ Km のペルーのイキトスの標高が 106 m とほとんど傾斜のない低地である。流域の所々に低い台地をもっている。

低地の基盤はブラジル高原と同じ結晶片岩とその上をおおう砂岩などの古生層で、その上に中

生層をのせている。ということは、このアマゾン川を軸として、ギァナ高地とブラジル高原の間で地向斜の構造をなしているといえる。さらに堆積と隆起を繰り返して、樹枝状に広がる流域の沖積平野と、その間に存在する洪積台地から成っている。沖積平野の中で、アマゾン川は本、支流ともに随所に網状流をもち、雨季になると、平水時よりも10mも水位が上昇するために水浸しになるところがある。河道沿いに自然堤防が数mの高さに形成され、ところどころに河跡湖をもつ後背湿地が存在する。このアマゾンの低地を植生や高度との関係から、バルゼア（低湿地）、イガポー（浸水森林）、テーゾ（中間台地）、テラ・フィルメ（台地）と分類出来る。



ブラジルの水系と地形

植生は常緑広葉樹が密生し合ったセルバとよばれる大密林を形成し、樹高は50mを越えるものもある。

(2) ブラジル高原

アマゾン川流域に幅広く、南部のウルグアイに向かって幅狭い逆三角形の形をほぼとっている。生成は先カンブリア代で、火山活動をともなった地殻運動によって形成され、地形的に安定陸塊とよばれている。この形はアマゾン川流域の向斜を含んで、ハドソン湾をもつカナダのローレンシア楕状地、バルド海をもつバルド楕状地と類似の地形である。高原は北流するアマゾン川の支流と南流するパラグアイ、パラナ川やウルグアイ川、東流するサンフランシスコ川などによって浸食される一方、各河川沿いに、堆積によって生じた平野部をつくっている。しかし、この日本の10倍以上の面積をもつ高原は均一の高さではなく、大西洋沿岸に結晶片岩からなるマンチライ山脈やマール山脈などの高い山地が走り（最高峰のイタチアリア山がある）、これよりアマゾン低地の中央部に向かって、緩く傾斜している。高原は下部より、ヒューロニアン系、アルゴンキアン系、ゴトランド系、デボン系……、などよりなり、傾斜していて、浸食されたために、所々にケスタとよばれる緩急斜面より成る山稜をつくり、数キロに亘る山脈になっているところもある。しかし、上空より眺めても全体的には平坦に近い波状高原である。

3 ブラジルの気候

ブラジルの年平均気温は18℃～28℃であるが、高度差によって多少の差異がある。

年降水量はほぼ750mm～3,000mmであるが、750mm以下の乾燥する地域が若干あり、この地域は砂漠的景観を呈している。また3,000mm以上の多雨の地域もあるが、大部分の地域は1,000mm～2,000mmである。しかしこの降雨は全体的に夏に集中している。

気温と降水量などから、ブラジルは熱帯雨林気候、サバナ気候、温暖冬季少雨気候、温暖湿润気候が分布している。

(1) 熱帯雨林気候

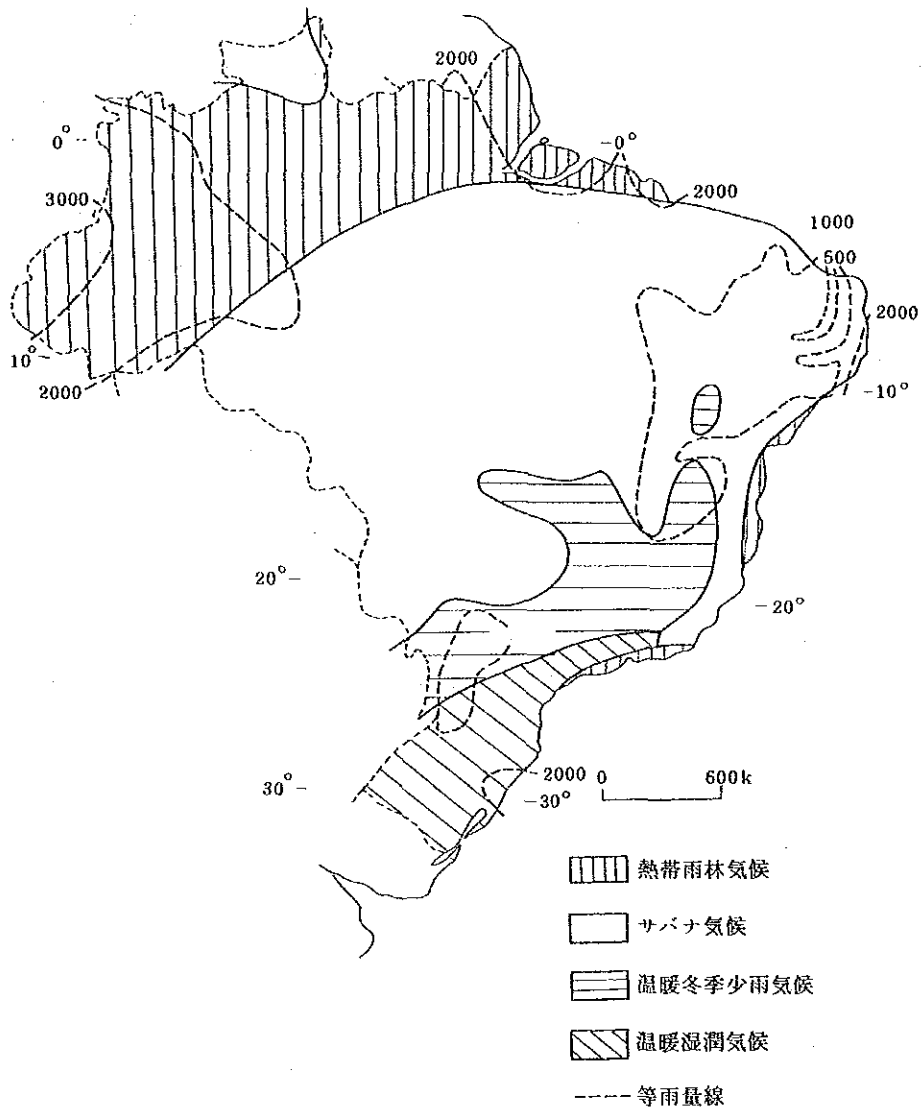
アマゾン川流域と南回帰線以北の大西洋沿岸にみられる気候である。年平均気温は25℃～28℃であり、夏と冬の気温差は小さい（2℃内外）のに対し、日中の気温は37℃位になることもあり、日較差が大きい。実際、ベレンやマナウスでは日中の気温は高く暑いけれども、夜は気温が下がり涼しくなる。アンデス山麓部では5、6月にフリাজュームというアンデス嵐が吹き、気温が数度下がることもある。

降水量はアマゾン上流で3,000mmを越すが、下流に向かって減少し、1,500mm近くになるところもある。しかし、河口付近では又多くなり、2,500mmを越し、大西洋沿岸のギアナとの国境付近では3,000mmを越す。大西洋沿岸の地域では1,500mm内外の降雨がみられる。この降雨はほぼ

毎日午後的一定時刻になると降るスコールである。この気候の植生は熱帯常緑広葉樹が密生し、樹高も 50 m を越すものもある。

アマゾンの本，支流域はセルバとよばれ，トメアスもこれに近い景観を呈している。

マナウス，ベレン，リオデジャネイロやサントスなどの都市はこの気候である。



ブラジルの気候

(2) サバナ気候

アマゾン流域の北部、南部の台地、ブラジル高原北部及び西部、さらにギアナ高地続きのブラジル北部にみられる気候である。

年平均気温は熱帯雨林気候にほぼ同じであるが、夏の気温と冬の気温の差は大きくなり、最高気温は夏のはじめにあらわれる。また、降雨も特徴があり、ブラジル北東部では年降水量が500 mm以下になるところもあり、ほとんど砂漠に似た状態のところもある。降水量の多いのはマットグROSS周辺で、2,000 mmを越すところもみられる。この地方は雨季になると河川が増水し、川幅を増し、オリノコとアマゾン川にみられるような、アマゾンとラプラタ川に流水が分流する双子川が誕生する。

しかし、大部分の地域は1,000 mm内外の降水量で、地域によって多少の差異はあるが、11月から6月までの夏に集中して降り、雨季とよばれる。残りの時期は雨の少ない乾季とよばれる。そのため、植生も、アマゾン流域のセルバとは異なり、ブラジリア周辺にみられる疎林と草原の混在する景観が代表的なものになる。これをカンボとよぶが、セラード開発のセラードもこの状態のひとつである。ただし、熱帯雨林に近い所ではセルバに近い景観であり、より降水量の少ないところでは樹木も育たない裸地をもった草原になっているところもある。

(3) 温暖冬季少雨気候

ブラジル高原中部、ミナスジェライス州、サンパウロ州北部、マットグROSSドスールなどにみられる気候である。

サバナ気候にほとんど類似し、植生、景観もほとんど同じである。ただ、冬の気温が18℃にならない。それでも、日中の気温はふつうかなり高くなるが、たまに、又ところによって、降霜をみることがある。

この冬季の涼しい期間はごく僅かであり、間もなく暑い日が続くようになる。

(4) 温暖湿潤気候

ブラジル高原南部、サンパウロ州南部、パラナ、リオグランデ・ド・スール、サンタカタリーナ州などにみられる気候で、日本の八丈島と那覇の中間で、やや降水量を少なくしたような気候である。

サバナのように、夏と冬の降水量の差が大きくないが、温暖冬季少雨気候のように冬季の気温が18℃にならない。冬季でも日中の気温はかなり上昇するが時に降霜や結氷などがみられることがある。丁度我々がサンパウロを訪問した7月20～24日は非常に寒く、郊外のジャカレー移住地付近では降霜があり、バナナの葉が枯れることがあった。(パラグアイのイグアス移住地では降霜があり、結氷さえみられた。)しかし、降雪はみられない。植物は常緑広葉樹が主であるが落葉広葉樹も存在し、冬季になると落葉するものもある。

サンパウロなどの都市はこの気候である。

参考文献

- 二宮書店
「地理統計要覧 1979」
- 国際協力事業団サンパウロ支部
「JAMIC直営移住民地概況 1978.6」
- 平凡社
「世界百科事典」
- 誠文堂新光社
「世界地理風俗大系, 南アメリカ編」
- 帝国書院
「新詳高等地図」

4 ブラジルの経済

広大な面積をもつ農業国（農業人口 1,466 万人で総人口の 13.4%）であるが、大部分は森林（60%）で、耕地としてはごく僅か（4.3%）しか利用されていない。しかし人口が少ないため、小麦（自給率 50%）以外は自給を行っている。世界に占める主な生産物（世界の 10%以上の生産物）をみると、マンジョカ（25.6%）、大豆（18.1%）、パーム核（17.3%）、さとうきび（14.9%）、オレンジ（18.6%）、バナナ（21.1%）、コーヒー（10.9%）、カカオ（16.8%）、シザル麻（33.1%）、馬（14.6%）などであり、世界市場に対して供給を行っている。かつて、著名であったコーヒーは 1975 年の降霜により大打撃を受けたが、現在は回復しつつある。その反面、カカオ、大豆、オレンジなどの伸びが著しく、とくに大豆においては 1967 年に 70 万 t の生産量が 1977 年には 1,180 万 t に増加し、U.S.A., 中国に次ぐ生産国となり、今後さらに伸展を遂げるであろう。

これまで、不毛の地であるとみられていたセラード地帯の開発も既に着手され、トマトや小麦、大豆に変ろうとしている。

今後の課題は生産性の向上と大土地所有制度の改革が必要とされているが、加うるに交通網の整備を促進し、沿岸部、主要幹線道路沿線のみならず、奥地の生産力の向上につとめていくことであろう。

又地下資源も豊富で、種々の鉱産物を産出するが、鉄鉱石（11.8%）、ボーキサイト、マンガン等の埋蔵量が豊富で、その開発も進められている。しかし、エネルギー資源、とくに石油の産油量が少なく（自給率 30%）、大半を輸入に頼らざるを得ない。しかし、近年マンジョカよりアルコール

を生産して、ガソリンに10%～20%混入をして自給姿勢を強めている。一方電力は豊富な水資源を利用して(水力発電量92.2%)発電している。

工業は中南米第一の地位を占めているものの、一次製品の生産が中心で、電気、機械類等は輸入している。しかし、工業化に力を注いでいることから今後の発展が大いに期待できる。

1968～1973年間の実質経済成長率は年間10%前後であったが、1973年末の石油ショックとそれに続く世界的不況の影響を受けて現在に至っている。目下第二次国家開発計画が進められているが、経済成長の不均衡、インフレの亢進、国際収支の悪化などによって修正を迫られている。ここ当分は経済成長(年間4～5%の見込み)は鈍化する見通しで、減速政策がとられている。1977年の経済成長率は4.7%、インフレ率38.7%、国民総生産は1,630億ドル、国民1人当りの所得1,440ドルであった。政府は外資導入については基本的に歓迎はしているが、昨年末、その運用面では選別化政策をとっていることは否めない状態である。

参考文献

国際協力事業団サンパウロ支部

「ブラジル事情と日本人移住の概況1978」

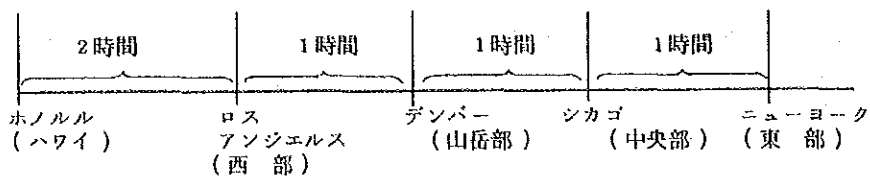
二宮書店

「世界各国要覧1979」

(1) ロスアンジェルズ

7月30日(月)、南緯、3度のところ、アマゾンの上流1,200Km奥地へ入ったマナウス(Manaus) — ネグロ川、セブラ川、マテイラ川の合流地点 — を朝8時45分に飛び立ち、一路アメリカのマイアミへ向う、往く時と違って帰り道ともなると、機内の7、8時間は慣れてきたせいもあり、さほど苦痛ではなくなった。マイアミで入国手続きを済ませてウエスタン航空に乗り継ぐ時間は僅か2時間しかない。我々の期待通り定刻通りに着陸したが、税関内は各地から来た乗客で混雑し、なかなかはかどらないのに気が苛立って来る。やっとの思いで税関を通過出来た喜びも束の間、我々の前には大きな難関が待ち受けていた。ウエスタン航空のカウンターにたどり着いた時、係員が「ロス行きの飛行機はキャンセルされて今日の運行はない」と説明した時には皆が一瞬狐にでも騙されたようにポカーンとなってしまった。天候もよく飛行条件の悪い日ではなかったのだから、日本では先ず考えられないこと、何とか国内線の他社の飛行機に乗ることが出来たものの、万が一出来なかったならば日程の上でも大変なことになっていただろうと思ひ、マイアミ空港を離陸した時に一人胸をなでおろした。日本では旅行業者を通じて乗りたい飛行機の予約をしておかなければ、乗る当日50～70分前に搭乗手続きがカウンターで簡単に出来るものだが、外国ではそう言うわけにはいかない。少なくとも前日にカウンターで搭乗名簿に名前が記載されているかどうかを確認しておかなければ、名前がいつの間にか抹消されている時があり、当日行っても実際に乗れない場合もある。今度の旅行中はずっと気を配り、目的地へ着くとすぐ事業団や旅行業者の人を通じて確認してもらった。習慣が変れば便利な時も時にはあるものの、不便を感じる方が非常に多い。ロス・アンジェルズ国際空港に着いたのは予定通り午後7時30分前で街はすでに夜のとぼりが立ち込み始める頃で、薄暗くなっていた。今までにアルゼンチン、パラグアイ、ブラジルの各空港を径由して来たが、このロスアンゼルス空港が手荷物の取扱が一番雑で荒っぽく、ベルトに乗って運ばれてくる荷物を見ると、荷くずれしたもの、スーツケースの角が凹んだものや、鍵のところが壊れかけたものがあつたりして驚かされた。それだけ乗降客の数が多し事を示していると思った。

ロスアンジェルズを中心としてアメリカ国内の時差は下記の表のようにニューヨークはロスより3時間進んでいることになり、ホノルルとは2時間の違いがある。また日本との時差は17時間であるが4月から10月までは、夏時間を採用しているので16時間の差になる。

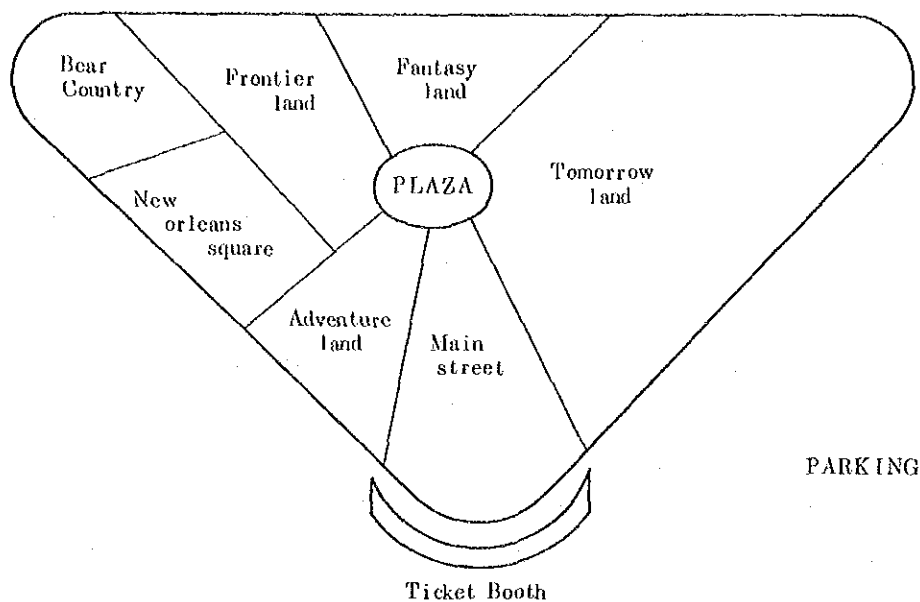


出迎えのマイクロバスでフリーウェイ（無料の高速道路を言う）を通り、ダウン・タウンの近くのホテルハイアット・リージェンシーへ無事到着する。サン・フランシスコ市内にはケーブル・カーがあり、バスも通っているが、ここロスアンジェルスには地下鉄もないし市内電車もない・市内外へ行く乗り物と言えばフリーウェイを車でとばす以外に方法がなく、軌道による交通機関が一切ない大都市としては世界でも珍しいところだ。バスは系統によって行き先が決っており、短期間の旅行者にとっては自由に乗れるものではなく、もっぱらタクシーやレンタカーを利用しなくてはならないそうである。

7月31日（火）車でディズニーランド（Disneyland）見物に出かけた。車はすぐにサンタアナ・フリーウェイを西に向かって約40分走った。一年間の降雨量が少なく、年間の降雨日は平均すると37日ぐらいだそうで、フリーウェイの道路わきに植えてある夾竹桃の木々にはスプリンクラーでひっきりなしに水を散布していた。外出するにも雨具の心配は9分9厘不要とのことで、とにかく雨の少ないところである。

ロス・アンジェルスから57Kmのアナハイ市にあるディズニーランドに40分後に到着した。ちょうど出勤時間に当たったためロスアンジェルス市内へ入る車線はかなり混雑していた。逆に市内から出る方は空いており平均時速85Kmで突走していた。やがて何千台も駐車出来る広々とした駐車場が目前に映った。それもそのはずで、年間の入場者は1,000万人もあり、ウォルト・ディズニーの意図で子供だけでなく、大人も共に楽しめるように遊園地を創ったと言われるだけあって、園内は大人も我を忘れて楽しんでいる風景に行き当たった。入場者が飽きない様に創意工夫が施されて、園内を7つの地域に割ってある——冒険の国、ニュー・オルリズ広場、熊の国、開拓の国、おとぎの国、未来の国、メインストリートそれぞれの敷地内へは柵がないので、どこからでも隣りの国へ入ることが出来るようになっている。ウィーク・ディであったことも好条件の一つであったが、混雑していると予想していた割には空いており、乗り物等の施設にはまだ長い行列が出来ていなかった。週末や祝日等になるとそれぞれの乗り物の入口には長い列が出来、乗るまでに一時間はかかると言われ、待ち時間も計算に入れておかないと日程がずれて来て困ることにもなりかねない。

カリフォルニアは果物の宝庫と言われ、オレンジやグレープ・フルーツ等の新鮮なジュースはやはり本場だけあって味もよかったが、熱帯地方、赤道附近のペレンやマナウスも熱帯特有の果物—パイナップル、マンゴ等が産出され、それらで作られたジュースを飲んで来た後で舌の先にまだそれらの味や香りが残っていただけに、そちらの印象が強さほどのことはなかった。



アメリカと日本の習慣の異なるものに、買物をすればさきまづ州税が6%プラスされてくる。例えば5ドルの買物をすれば30セントの州税がついてくるので結局5ドル30セント支払わなくてはならない。日本で煙草を買えば税金が含まれた定価がつけられているので、日本のどこで買っても同じ値段であるが、アメリカでは州によって税金の率が異なるので一定の価額でおさえることが困難である。「ケント」(KENT)を買ってもニューヨークで90セントしたものが中部・山岳地帯のデンバーでは45セント、ロスアンジェルスでは80セント地域によって値段がまちまちであった。それに一包み(one carton)で買った方が割安にもなる。

ディズニーランドを後にした我々は再び市街地ダウン・タウンの方へ戻って来たが、車はロスアンジェルス最初の通りと言われるオルベラ街(OLVERA STREET)へ立寄った。メキシコ人の街で舗道はレンが敷きで中間にはアビラアドベと言われる(1824年に建てられたもの)現存する最古の家があって、博物館になっており、沿道に並ぶ屋台の店には、メキシコ特産の品々が売られていた。メキシコ・オパールをはじめ銀製品、革製品それに民芸品が店狭しと並べられていた。しかしいずれにしても土産品の選択が一番問題であろう。手頃な商品の多くはアメリカ以外の製品であったりし、——特に made in Japan, made in Korea, made in Hongkong が目につく——うっかり買ってホテルでよく見れば日本製だったりすることがしばしば。買物には商品に対する充分な注意が必要であろう。ロスアンジェルスで僅か2泊ではあちこちへと足を運ぶことも困難

であり、市内の一部を垣間見ることが出来たのは、この日一日だけであった。

8月1日(水)午前7時30分には早やマイクロバスに乗り一路空港へと向った。途中ラッシュにばかり、車の渋帯が見られたので、高速道路を避けて普通の道路を走った。空港近くの丘には、石油が産出されるとあって、カマキリの様な汲み上げ機械が数多くあり、キッコン、バタンと働いていた。石油資源に恵まれない日本にとって実に羨ましい光景であった。10時発のコンチネンタル航空に乗り、一行8名はハワイ・ホノルル目指して機内の人となった。

(2) ホノルル

If you haven't seen the Neighbor Islands, you really haven't seen Hawaii.

これは絵葉書を小冊にした写真集の表紙の裏に載っていた言葉である。

ハワイ諸島はKAUAI, OAHU, MOLOKAI, LANAI, MAUI, HAWAIIの6島から成り、各島へは巡航船で渡れるようになっている。その中でも一番よく知られているのが、

我々の立寄ったOAHUの島であり、国際空港ホノルルがそこにある。ホノルル空港に近づくにつれ、天候は悪くなり、空

港からパンチボール (Punch Bowl) へ行く途中ついに雨が降り出したが、それもやがて止み、車は海岸通りの裏通り

を走りながらワイキキ海岸が眼下に見下ろされるパンチボールの頂上に着いた。南はダイヤモンド・ヘッド (Diamond

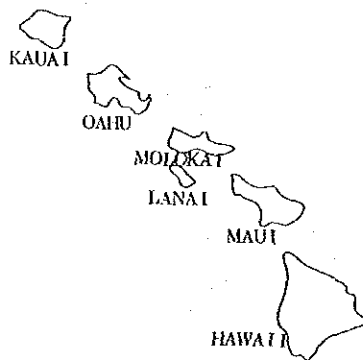
Head — ホノルルの象徴で「東」の意味で、長方形の形をした火山、海拔232m)、西にホノルル空港が見えた。北側の斜面には第2次大戦、ベトナム戦争に至る約22,000万以上

のアメリカ兵が葬られている国立記念共同墓地 (National Memorial Cemetery) がある。

時にはこの墓地の事をアメリカ本土、ワシントンの墓地に名ぞらえて、"The Arlington of the Pacific" と呼ばれることもあるそうだ。

死火山パンチボールの噴火口はアウイ火山帯のあるKoolau Mountain range にうずまっており、見はらしのよい下町ホノルルを造っている。ガイド役を兼ねる運転手の話によると、その墓地の北側にそびえるKoolau山脈の斜面に密集して建てられている家が原住民達のもので、白人達に次第に丘の上へ押しやられたもので、土地代は月1ドルと言うように現在では政府が面倒を見ているとか。

パンチボールを後にした車は国道からはずれて、うっそうと生い茂った林の中、木のトンネルを通り抜けて、ヌワヌ・バリへ来た。このヌワヌバリ (Nuuanu Pali) はホノルル市へ通じるバリ



ハイウェイの途中で、コオラウ山脈 (Koolau Mountain range) の切れ目に当る所にあり、常に北東の強い風が吹き抜けており、この付近は霧や雨になることが多くて、晴れ間は滅多にないそうである。我々が訪ずれた日もどんよりと曇って今にも降り出しそうな天候であった。パリ (Pali) と言う言葉はハワイ語で「峠」を指し、カメハメハ一世が敵を全滅させた古戦場でもある。左手の切り立った断崖絶壁からカメハメハ一世の導いる軍に追われた敵がころげ落ちたところとも言われ、また女性が要注意のところでもある。強い北東の風にあおられて、スカートが上へまくりあおられるために、何も知らずに来る女性観光客は押えるのに苦労すると聞かされた。案の定、下から歩いてやって来た高校生か大学生らしいアメリカの二人連れがまともに風にあおられ、スカートは上の方へひるがえり、絶え間なく吹きつける風に押し切れなくなって、「事実は小説よりも奇なり」をこの目で体験した。車は再び元来た道へ引き返し、市街地へ入る手前でお寺の前を通り過ぎた。院内のコンクリート製の五重の塔——釘は一本も使っていない——は日本の故郷を忍んで建てられたものらしく、近くの墓地内にある日本人の石碑は全部遙か遠く離れた日本の方を向いている。かつての移住者達はハワイ人となりながらも心の奥では「自分たちは大和魂のある日本人」と日本への愛着の念は強かつたらしい。ハワイにはまたハワイ独特の花が咲きほこっている。Protea, PikaKe, Vanda, Orchids, Plumeria, (レイに使われる花), Anthuriums, Hibiscus (州花), GardeniaやDendrobiums, その他タコが木にとまっているような恰好をしたタコの木やゴールデン・シャワーやシルバー・シャワーと数の上でも豊富であり、種類を変えて一年中絶えることなく咲き競っている。

さてショッピングとなると、香水、洋酒、煙草等の免税品の買物の楽しみがある。免税店はワイキキのハワイアン通りに本店があり支店が空港の待合室にもある。

(主な物)

1. アロハシャツとムウムウ

☆アロハ——丈の長いものとジャケット式のみじかいものとある。

☆ムウムウ——ミニとマキシムとパンタロンの三種類あり。

2. 黒サンゴ——マウイ島やモロカイ島の近海の深海でとれたものを加工したもの。

3. ラオハラ織り——ラオハラの葉をなめして作ったもので、財布やハンドバックや帽子がある。

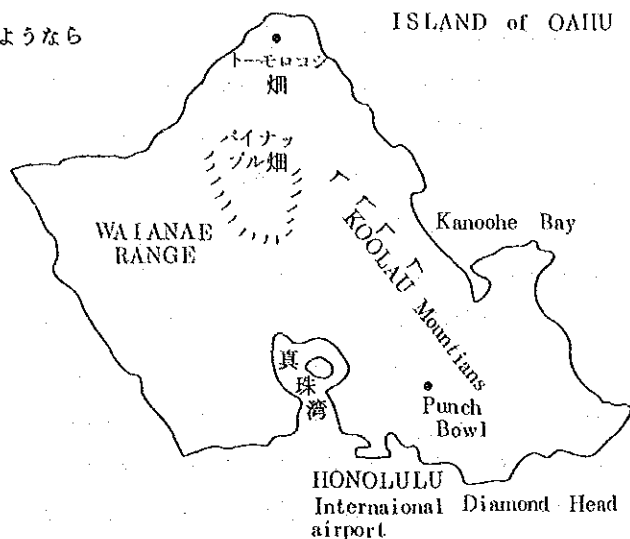
4. 花の香水

5. マカデミアナッツ・チョコレート

買物はワイキキのカラカウア通りに土産屋が並んでいるほか、アラモアナ公園と向かい会った敷地内に建っているショッピング・センターがある。ここは面積が135万3,000㎡に及び1階は駐車場やレストランがあり、主な商店は2階にある。我々が宿泊したアラモアナ・ホテルとは橋で結ばれており、非常に便利でもあった。買物をする時もそうであったが、ハワイへは日本からの観光客

も多く、日系人が全体の27%を示めていることでもうなずけるが、空港・ホテルを初めレストランや土産品店に至るまで英語の外に日本語で書いた標識や看板があり、どの店にも日本語が話せる店員を置いているのも特長の一つであった。教えてもらったハワイ語を紹介しておく。

- アロハ (Aloha) — 今日は、さようなら
- マハロ (Mahalo) — ありがとう
- モイモイ — 寝る
- カウカウ (Kaukau) — 食べる
- ワヒネ — 女性
- カヒネ — 男性
- イヌ (Inu) — 飲む
- カラ (Kala) — お金



我々を案内してくれた運転手の話だと、ハワイへはアメリカ本土からの観光客が一番多く、次いで日本からだそうである。学校の先生は75%が日系人だと言うことであった。

アメリカ合衆国に併合されるまでの約100年間、8代にわたって続いたハワイ王国も、今では世界各国から寄り集った人種でひしめいており、ハワイ及び混血ハワイ人が19%、白人が28%、日系人が27%、中国系が4%、黒人が1%で、全くそこには人種差別が見られない。そして全人口87万人のうち82%近くがオアフ島 (OAHU) に集っている。地球も狭くなり、このハワイは勿論のこと、南米の各国にも日本人がいて、彼等が3、4人でも集まれば日本語で話し合い、まるで外国にいるような気持ちになれない時もある。今度の視察旅行では「教育、文化、経済、移住地の生活様態等」を主目的として視察することになっていたが、残念な事に、教育面の視察があまり含まれておらず学校訪問がなかったのが痛かった。我々の利用した唯一の交通機関の飛行機の便が主要都市 (アルゼンチンのブエノス・アイレスやブラジルのサンパウロやベレン) へは金曜日の夜着いて土曜・日曜日にかけての市内観光となり、全ての店が閉店となって充分なショッピングも出来なかったし、学校も休み、おまけに冬休み中とあって、日程上に問題があったようにみえる。

8月2日 (木) 午前中は8名が思い思いの行動をとり、買い忘れた土産物を買に行ったり、コイン集めに銀行をかけずり廻ったりして時間を費したりした後、早目の昼食をとって、空港へ移動、午後2時55分発の日航3便に乗り、旅の思い出を一つ一つ胸にたたみ込みながら成田へと向かった。成田へは6時間30分後の定刻に着陸、全旅程で日航だけが定刻に離陸し、定刻に着陸したのは、さすが日本だけあると誇りに思った。

随 想

移民とは何か

富山県立福野高等学校
校長 川 人 貞 現

— 移住者の郷愁 —

我々は、アルゼンチン、パラグアイ、ブラジル、そして北米の一部を視察研修して来たのであるが、多くの風物を見て、その広大さや、美しさに感嘆の声をはなつ一方、そこに生きる人々—— 大部分がヨーロッパ系のスペイン人やポルトガル人の移住民及びその子孫、少数の原住民のインディオ、そして移住民との混血、あとから移住していった日系人、及びその子孫などがくらしている——を見て、移民とは一体何なのだろうかを考えさせられた。

私は、帰路、ハワイのホノルル空港より日航機の中で隣り合せの席に座った50才あまりの御婦人とたまたま話をする機会を得たが、御婦人の手にしておられる手帳のメモは、すべて英語で書かれている。「失礼します」と言ってお座ると、「御旅行ですね、どこへいらっしゃったのですか。」と話しかけてこれられる。南米を廻って来たいきさつを話すと、「子供さんは何人いらっしゃいますか」、 「お孫さんは」と気軽に話しかけてこられる。こちらもつい立入った受け答えをしなければならないようになって、お聞きすると、「ハワイで生れて、今は福岡に嫁いでいます。子どもは日立市(助川)に住んでいて、孫もあります。成田空港には子どもが迎えに来ていますので、機内で免税品のジョニ黒を買いたいのですがどうすればよいのでしょうか。」などと気さくに話される。

つまり、御婦人は、ハワイ生れの二世で、父母の故郷である日本に再びお嫁に来たのであって、約1ヶ月間自分の生れ育ったハワイに里帰して、父母の墓参をしていたということである。

飛行機が空港を飛び立った直後、窓から、遠ざかっていくハワイの島々を、さかんにカメラに収めていた婦人の姿を思い出して、自分の生れ育った処に対する郷愁があのような形で表現されていたのかと背かれたのであるが、成田に近づくにつれて、また、カメラを持ち出して、窓わくにカメラをむけていらっしゃる。「このあたりが鹿島浦ですか、九十九里浜ですか」と尋ねられても、その地形からは、どれがどうなのか答えられない。御子息の住んでいらっしゃる日立市に近い処の景色として、やはり心引かれるものがあるであろう。日本に帰って、「イライラするような忙しく慌しい毎日がまた始まります」という言葉の中に、自分の生命をそこで承け、それを育ててくれたハワイが、この御

婦人にとって、最も心の休まる故郷なのだなあと感じたのである。



私が勤務する福野高校の大先輩に松沢謙二先生という方がいる。先生は、本校の前身、福野農学校の教諭であったが、大正末期、富山県でも、当時の農村困窮を救わんものと、時の県知事、白上祐吉は、県内有志と相はかり、海外移民協会を設立、松沢先生にこの協会の幹事を委嘱した。先生は、先発派遣の重要な任務を帯びて、三家族11名を従えて、玉喜夫人とともに昭和2年勇躍ブラジルに渡られたのである。

松沢夫妻一行をのせたサントス丸は、6月4日故国を出帆、7月21日ブラジル国サントスに投錨、8月11日目的地第三リアンサに第一歩を踏み入れた。

第3リアンサは、サンパウロ市から750キロメートルもはなれた奥地にあった。薪を焚いて走る軽便鉄道にゆられ、ルッサンビラという寒村の駅に降り立った一行は、更に原始林の中を約60キロメートルばかりトラックにゆられ、コトベロ川近くの低湿地に着いた。「そこには原始林を伐採し、半焼となった大木が黒々として交錯しているのみで、雨露を凌ぐ小屋一つなく、この原始の大木を見て、唯、呆然としてなす術を知らなかった。気をとり直して男子は、かねて用意の天幕を張り、女達は炊事をはじめ、怪鳥の鳴声、群なす野猿の呼び、猪や豹に驚かされつつ椰子の木を板割にして小屋を建て、萱を刈り集めて臥床をつくり、先ず自活から始める文字通りの神武創業の第一歩」であった。とくブラジル富山県人会誌>創刊号は書いている。

松沢先生は、直先にマラリヤにおかされたが、病魔と戦いながら、後続部隊受け入れの準備を急ぎ、年末にはようやく中心地帯に入植者宿泊所と形ばかりの事務所を急造した。そして、昭和3年6月、第2回の入植者を受け入れたが、棚ボタ式の話聞いて移民して来た人達であったので、現地に着いて驚き、すべての憤懣を現地責任者である松沢幹事にぶっつけるので、入植者と海外移住協会との板ばさみになった松沢先生の苦悩は言語に絶した。

数年を経ずして、移民協会からの助成援助が続かなくなり、やがてこの移住地がブラジル拓殖会社に移管されることになった。「責任感が強く、正直一途の氏は、自ら日雇人のような立場をとって、済まぬ済まぬで働く姿は、涙なくして見るができなかった」とも記し、また、生涯、繩の帯を結んで、バンドを用いられなかったとも伝えられている。

かくしながらも、第3リアンサ富山村は移住者が増え、越中人特有の粘り強さで次第に軌道に乗り、主作物のコーヒーも成樹となったが、昭和10年、アルゼンチンを北上して来た大寒波で大きな被害を受けた。このため、サンパウロなどに転住する者が続出した。その後、この第3リアンサは県人のほかに、長野県人も入植して、60家族の村に発展し、養豚、養鶏、コーヒー、牧場、果樹、養蚕等も営んで今日に至っている。

松沢先生は晩年には過労がたたって、長く病床につく身になり、昭和38年10月11日、玉喜夫人や家

族、村人にみとられながら永遠の眠りにつかれた。



今回の南米視察は、全く意外なことから私が行かなければならないはめになったのであるが、ブラジルを訪ねる以上、本校の大先輩の遺業の跡を訪ね、私の母の友人でもある玉喜夫人に親しくお逢いして、先生の遺業の一端を語りあいたいと思ったので、早速、アリアンサに居られる松沢玉喜夫人に、お訪ねする旨の手紙を差し上げたのである。

玉喜夫人からの御返事に「日本は私のあこがれの故郷です。親、兄弟はいないけれども、私の親しい友人も居られることだし、私の長女、よし子が6年前に、縁あって柴田忠三に嫁いで、日本に参りました。今は小矢部市の芥川に住んで居ります。そこには、ブラジル生れの孫らで、男2人、女1人の子持ちだから夫と5人家族でくらし居ります。娘は、ブラジル生れで、ブラジル育ち、何の躰も教えてないので恥しいことです。近隣の人達から、何も知らないブラジル育ちの娘に大変良くして貰うと便りに書いて居りますことも嬉しいことです。よし子の故郷がブラジルなので、私が日本を恋うるのと同じでしょうか。父の墓参りをして、兄弟に逢いたいと言って居りますが、何と申しまして、遠く離れている処、旅費も相当な事なので、簡単には来られない云々」と書き記されて居る。

私は、この手紙を見て、松沢先生のお嬢さんが日本に来ておられ、しかも、本校のすぐ近くに住んで居られることを知って驚いた。連絡をとった処、御主人と一緒に、すぐ自宅を訪ねて来られたので、一晩、ゆっくりとお話を聞いた。玉喜夫人の手紙にもあった通り、故郷ブラジル、アリアンサへの郷愁は、涙にくぐもった悲痛な声で「一度帰りたい」と言いはなつて、しばらくは次の言葉が出なかったほどで、私も思わず、何とかしてあげられないものかと思ったことである。

7月2日、事前研修会で国際協力事業団本部に行った時、サンパウロ滞在期間が4日間もあるから、アリアンサを訪ねたい旨、申し出た処、その間行事日程も組まれていて、到底行って来る時間がないということで、今回は諦めざるをえないことが分ってきたが、玉喜夫人にも、よし子さんにも手紙でその由を書き送り、御返事も貰えないまま、慌しく7月13日成田空港を出発してしまったのである。

ところが、7月20日、サンパウロ空港に到着してみると、玉喜夫人が四男の涼君と共に迎えて居られ、私のために750キロメートルの道のりを寝台バスにゆられて、アリアンサからはるばる出て来られたのであった。更に22日には、長男貧君、次男均平君、それに貧君の次男で玉喜夫人には孫に当る清光君と5人もの家族が大挙して私のホテルを訪ねて来られ、懐しい思いのだけを語り合い、語りつくして極りがなかったのである。

しかし、考えてみると、この5名の御家族すべては、私にとって初対面の方々である。亡くなられた松沢譲二先生が福野農学校の元教諭であったということ、玉喜夫人が私の母の知人であるということが、こんなにも懐しく語り合うことの出来るすべての理由なのだろうか。

私はこの度の旅行で数多くの県人会の皆さんにも逢い、又、福野高校の卒業生の皆さんにもお逢い

したが、殆どの人は、今まで全く面識のなかった人々である。それにもかかわらず、松沢先生御家族にも劣らないほど、懐しく親しく語り合えたという意識を持ちえたのであるが、その原因は何なのだろうか。



南米諸国に今住みついている日系の人達は、日本の国がサミットに参加する経済大国であるという意識を踏まえて、ものを言っている。それが今の自分達の心のより所であり、働きがいであり、生きがいでもあるという。もっと日本が立派になってほしい。その力で自分たちのバックボーンをもっと強く支えてほしいと異句同音にいつている。

移住をして数十年にもなる、ある高令者の人の話では、「戦前の移民は、国家の政策として、窮乏する農村の救済のためにとられた国策としての移民であるが、それは移民というものではなく、棄民そのものであった」とのことである。なるほど松沢先生がアリアンサの開拓にリーダーとして誉められた辛酸は、今次大戦に、アッツ島やサイパン島、ガダルカナル島にとりのこされて玉砕した兵隊の指揮官のようなものである。弾薬食糧を送ろうと思っても、到底輸送船が行けそうにもなく、また内地にも食糧弾薬がなくなってしまっていたのであった。

移民の船がサントスの港に着く直前になって、船員が言った「さあ、ゴミ捨て場に着いたぞ」という言葉に、乗っていた移住者の一人が驚いて、説明を求めると、「俺たちはゴミ捨て人夫で、サントスはゴミ捨て場さ、だから、お前たちはゴミということになるなあ」と言ったそうであるが、この話をされた高令の戦前移住者には、日本国家というものに対する怨念みたいなものが感じられた。この苦勞を、この苦しみを自分の子供たちには誉めさせたくない。何とかして立派な教育を受けさせて、苦しいローソサイテイからぬけ出し、ハイソサイテイに浮び上げたい。怨念が形をかえて、そういう願いに凝結していったのではなからうか。こうした願いの中で、二世、三世は、育てられていったのである。だから日系人の教育熱は、他のヨーロッパ系の人達のそれより非常に高く、今のブラジルの日系二世三世の代表的職業は、医者と弁護士になっているとも言われる。また、現在まで既に日系人の中から、二人の閣僚大臣も出しており、次は州知事に何人か当選者を出したいというのが我々の願いだとも言われる。日系人は優秀であるという言葉もしばしば聞いたわけであるが、日本人の優秀性は、他にいくつかの理由も考えられるが、狭い国土の中で、多数の国民が、激しい生存競争の中におかれて、互に磨き合い競い合っていく社会に培われた人生観なり、世界観に支えられて出来たものであると私は思う。ブラジルでの二世三世の今の活躍は、その一部は、日本人の優秀性もあるかも知れないが、塗炭の苦しみをなめた一世の怨念と悲願に支えられて成長していったものであるに違いない。国の盛衰は世界の歴史が示す通りである。日本の国がサミットにも加われなくなった時、日本経済が破綻した時、日系ブラジル人は果してどのような思いをもって日本の国を眺めるであろうか。

それは、1世2世の人々までは郷愁としての心のつながりを日本に結び留めているであろう。しか

し、3世4世の日本人は、果して祖父や曾祖父と同じ思いを持つであろうか。

ブラジルは今、移民を受け入れている国である。そして、今まで混血を奨励して来た。だから人種差別は、他の国に比べて非常に少ない。しかし、日系やドイツ系のブラジル人は混血を好まないという。そして、日系の3世4世にもなると日本語が話せない人も多いということだが、ドイツ系では3世4世でもドイツ語の分らない人はいないという。顔は日本人の顔をしていて日本語の話せない日系ブラジル人をドイツ系ブラジル人は軽蔑するそうだが、日系の3世4世の心の中には、自分が日系であることを積極的に否定し、ブラジル人になりきろうという意志の働いていることが指摘される。血統的には日本人の顔を持ちながら、心はもはやブラジル人なのである。そこには日本への郷愁は、みられない。むしろ、皮膚の色に残る日本人の血統を混血ということによって薄めていこうという方向が出てくるのが自然であろう。日本の国家や、その政治経済の動向に一喜一憂するという心情は、更に薄められていくに違いない。

私は思うのである。移民、移住は、かつては、出稼ぎであったかも知れない。或いは、日本の国益を考えての政策であったかも知れない。この段階では意に反する結果が出れば、国家が棄民のような処遇をするのも止むを得なかったかも知れない。しかし、これからの外国移民は、むしろ、移住する人々にとって、人間として新天地を求め、働く場所、生きる世界を求めての棄国——国を棄てた人——でなければならないのではなからうか。従って、いつの日か故国に帰る、或いは郷土に未練を残す郷愁的心情に恋々とするような哀れな存在であってはならないと思うのである。だから、移住者に対する国のサービスも、日本の国益を考えてのサービスではなく、発展途上国の開拓の為の人間愛的立場からの真の意味の国際協力という方向からでなければならないと思うのである。

高校教師海外研修派遣一覽表

	40年度	41年度	42年度	43年度	44年度	45年度	46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	54年度	字 校 名	職 名	教 師 名
東北ブロック						○					○					宮城県立富良野農業高校教諭	道下岩夫	道立旭川農業高校教諭佐藤吉光
				○												弘前市立弘前実業高校教諭	三浦 稔	八戸市立第一高校教諭 植村雅義
					○											県立江刺高校校長	高橋利明	県立盛岡農業高校教諭 高橋 爽
					○											宮城県農業高校教諭	石川謙三	宮城県盛岡農業高校教諭 太田勝昭
						○										県立鷹巣農林高校教諭	成田節治	県立鷹巣農林高校教諭 高瀬 亨
		○														県立上山農業高校校長	枝松孝一	県立新庄農業高校教諭 神崎重美
				○												県立岩瀬農業高校校長	村田春男	県立福島農業高校教諭 佐藤秀義
					○											県立加茂農林高校教諭	皆川洋作	県立長岡農業高校教諭 三沢敏夫
			○													県立笠岡高校校長	加藤省三	県立石岡第一高校教諭 桜井徳郎
				○												県教育委員会指導課産業教育係長	杉山保	県立小山園芸高校校長 増淵晃章
関東甲信越ブロック				○												県立重水高校教諭	萩原行雄	県立勢多農林高校教諭 石井三郎
																県立徳谷農業高校教諭	田辺勲松	県立秩父農工高校教諭 深町 栄
																県立安房農業高校教諭	渡辺浩	県立千葉東高校教諭 水元清志
						○						○				都立瑞穂農業高校校長	稲垣実夫	都立農林高校教諭 野中 進
																県立平塚農業高校校長	石川寿雄	県立厚木東高校教諭 篠崎昭雄
																県立磯山工業高校教諭	中島真人	県教育委員会指導課主事 森川 映
																長野県須賀川商校長	坂本勝三	長野県北佐久農業高校校長 菅坂高
																県立岩田農業高校教諭	山内正次	同校校長 藤田良明
																県立上市高校教諭	石坂久忠	県立福野高校校長 川人貞規
																県立柳田農業高校教諭	徳二晋一	県立金沢二水高校教諭 酒井清男
東海北陸ブロック																県立郡上高校教諭	鈴木義秋	県立岐阜農林高校校長 鷺見昌美
																県立安城農林高校教諭	立川賢一	同校教諭 岩本 肇
																県立名張高校教諭	松本嘉一	県立桑名工業高校教諭 一木直智
																県立福井工業高校教諭	酒井探兵衛	県立福井農林高校教諭 三上実雄

近畿	滋賀																		県立彦根西高校教諭 山田哲, 県立守山高校教諭 石倉光昭
京	京都																		府立桂高校教諭 斉藤進, 府立木尊高校教諭 山本圭良
大阪	大阪																		府立園芸高校教諭 金崎一夫, 府立池田高校教諭 小野昌和
兵	兵庫																		県立神戸高校教諭 井島猛雄, 県立豊岡農業高校教諭 植木鶴久
神	奈良																		県立郡山農業高校教諭 森教員, 県立郡山農業高校教諭 松木政久
和歌山	和歌山																		県立橋本高校教諭 相田武彦, 県立田辺工業高校教諭 任可隆
鳥取	鳥取																		県立鳥取商業高校校長 谷本威, 県立倉吉農業高校教諭 秋藤宏之
島根	島根																		県立松江農林高校教諭 妹尾啓雄, 県立出雲農林高校教諭 岩成節夫
岡山	岡山																		県立天城高校教諭 高田浩二, 県立高松農業高校教諭 岸正二郎
広島	広島																		県立西条農業高校校長 藤岡勉, 私立広島大学附属工業高校教諭 相川忠久
山口	山口																		県立徳島高校教諭 藤本俊輔, 県立山口農業高校教諭 石田武雄
徳島	徳島																		県立板野高校校長 中島圭之助, 県立城北高校教諭 安芸武
香川	香川																		県立石田高校校長 矢野豊教, 県立笠岡高校教諭 長野茂
愛媛	愛媛																		県立伊予農業高校教諭 武管利博, 県教育委員会高校教育課指導主任 高井昭男
高知	高知																		県立高知農業高校教諭 立田好次, 県立安芸高校教諭 高橋隆
福岡	福岡																		県立久留米農業高校教諭 藤本東太, 県立三池農業高校教諭 大坪善行
佐賀	佐賀																		県立伊万里農林高校教諭 渡口末男, 県立埴田工業高校教諭 中島哲太郎
長崎	長崎																		県立諫早農業高校教諭 真崎昭夫, 県立北松農業高校校長 川道岩見
熊本	熊本																		県立天草農業高校校長 丸岡啓一, 県立熊本農業高校教諭 曾藤愛治
大分	大分																		県立宇佐農業高校校長 外園謙, 県立宇佐農業高校教諭 松山啓
宮崎	宮崎																		県立宮崎農業高校教諭 桑畑孝司, 県立宮崎農業高校教諭 池田松男
鹿児島	鹿児島																		県立鹿嶋農業高校教諭 大村高教諭 東園敏, 県立加世田農業高校校長 宮原隆
沖縄	沖縄																		琉球政府立南部農林高校教諭 多部政照, 沖縄県立真和志高校教諭 平良昭男
計	計	2	4	5	5	5	7	7	7	9	10	6	7	8	8				
果	果	2	6	11	16	21	26	33	40	47	56	66	74	81	89	97			

(注) この一覧表は国際協力事業団(旧海外移住事業団)が、この制度を設けて以来全高海協・都道府県高海協及び都道府県教育委員会等の協力を得て派遣した各年度別高校教師派遣者数計表である(学校名・職名等は研修派遣した当時のそれ等である。)

全高海協派遣: 千葉県立京葉農業高校校長 原 業 良 富
 東京府立立川農業高校校長 市 原 隆 雄
 東京府立豊産農業高校校長 高 根 沢 良 富
 栃木県立真岡農業高校校長 高 根 沢 良 富



JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY

国際協力事業団

所在地 東京都新宿区西新宿2丁目1番地
新宿三井ビル内 私書箱216号 〒160
TEL 東京 (03) 346-5311 (代)